第４４回「全日本中学生水の作文コンクール」
入賞作文集

水について考える

主催　水循環政策本部・国土交通省・都道府県
後援　文部科学省・厚生労働省・農林水産省・経済産業省・環境省・
全日本中学校長会・水の週間実行委員会・独立行政法人水資源機構

「健全な水循環」
ロゴマーク

第４４回　全日本中学生水の作文コンクール について

水は人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源であり、限りある資源でもあります。

「水の日」及び「水の週間」は、水の大切さや水資源開発の重要性に対する国民の関心を高め、理解を深めるため、昭和 52 年の閣議了解により政府が定めたものです。年間を通じて水の使用量が多く、水についての関心が高まる時期である８月の初日を「水の日」（８月１日）とし、この日を初日とする一週間（８月１日～７日）を「水の週間」として、水に関する様々な啓発行事を毎年実施しております。

この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和 54 年より「水の日」・「水の週間」行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいはご家族や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

平成 26 年３月に水循環基本法が成立し、８月１日は法律で定められた「水の日」となりました。このことから、「全日本中学生水の作文コンクール」を政府全体の取組とするため、最優秀賞に内閣総理大臣賞を、優秀賞に関係省大臣賞を創設したところです。

今回は、全国の中学生から 9,249 編（学校数 404 校）の応募があり、自らの体験を通じ日常生活における水の貴重さを表現したもの、美しく豊かな水を未来へ受け継いでいくために水を大切にしていこうという気持ちが表現されたもの、過去に各地で発生している地震や豪雨災害等の経験を通じて水について考察したもの等がありました。

このたび、入賞作文 40 編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校やご家庭において、「水」について考えるきっかけとしてご活用いただければ幸いです。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、またご多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚くお礼申し上げますとともに、ご協力いただきました文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々に深く感謝申し上げます。

令和４年８月

国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部

「水の日」・「水の週間」について

「水の日」及び「水の週間」については、昭和 52 年５月の閣議了解を基にその行事等を実施して参りました。諸行事の実施により我が国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することを目的に、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている８月の初日である８月１日を「水の日」、この日を初日とする一週間を「水の週間」としております。

「水の日」及び「水の週間」について

閣議了解

昭和52年５月31日

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め 、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年８月１日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

平成 26 年３月に水循環基本法が成立しました。本法律では、水が健全に循環し、そのもたらす恵沢を将来にわたり享受できるよう、水循環に関わる施策を包括的に進めていくことが不可欠であるとされました。また、同法第 10 条において、「水の日」が８月１日と規定され、国及び地方公共団体は水の日の趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならないとされています。

水循環基本法（平成二十六年法律第十六号）

（水の日）

第十条　国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水の日を設ける。

２　水の日は、八月一日とする。

３　国及び地方公共団体は、水の日の趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならない。

全日本中学生水の作文コンクールは、広く国民が水の重要性についての理解と関心を深めるための普及行事として、「水の日」・「水の週間」行事に位置付け実施しているものです。

目次

最優秀賞（一編）

《内閣総理大臣賞》 一滴との出会い 徳島県 阿南市立那賀川中学校 三年 笠江 駿 1

優秀賞（十編）

《厚生労働大臣賞》 琵琶湖疏水を作られた皆さんへ 京都府 龍谷大学付属平安中学校 三年 鈴木 智尋 2
《農林水産大臣賞》 繋ぐ水 新潟県 新潟大学附属長岡中学校 三年 齋喜 璃音 3
《経済産業大臣賞》 水と育む輪の中で永遠に 宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 三年 三浦 世来 4
《国土交通大臣賞》 廃油石けんづくりを通して 愛媛県 高知県宿毛市愛媛県南宇和郡愛南町篠山小中学校組合立篠山中学校 二年 木下 そら 5
《環境大臣賞》 『水の惑星の未来は私たちが創る』 愛知県 豊橋市立本郷中学校 三年 中村 光里 6
《全日本中学校長会会長賞》 命ある水 岩手県 盛岡中央高等学校附属中学校 三年 澤井 佳恋 7
《水の週間実行委員会会長賞》 私の断水体験記 和歌山県 和歌山県立向陽中学校 二年 福田 純伶 8
《独立行政法人水資源機構理事長賞》 見える水と見えない施設 三重県 高田中学校 二年 谷野 由依 9
《シャワーズ賞》 山の水にはかみさんがいる 新潟県 上越教育大学附属中学校 三年 井口 慶香 10
《中央審査会特別賞》 みんなが幸せになる洋服を 茨城県 茨城大学教育学部附属中学校 三年 金沢 青空 11

入選（二十九編）

北海道 下川町立下川中学校 二年 三浦 かんな 12
岩手県 盛岡市立下小路中学校 二年 佐藤 奈穂 13
宮城県 仙台市立郡山中学校 二年 増川 智穂 14
福島県 会津若松市立一箕中学校 二年 満田 栞音 15
東京都 渋谷教育学園渋谷中学校 三年 沖田 樹音 16
神奈川県 聖園女学院中学校 一年 永峰 由埜 17
富山県 高岡市立牧野中学校 一年 湊 遥真 18
岐阜県 垂井町立不破中学校 二年 矢橋 悠 19
静岡県 不二聖心女子学院中学校 二年 石川 怜奈 20
静岡県 静岡市立両河内小中学校 九年 山崎 倖来 21
愛知県 名古屋市立若葉中学校 三年 薛 知明 22
三重県 高田中学校 二年 山本 沙羅 23
滋賀県 大津市立日吉中学校 三年 石本 栞菜 24
京都府 京都先端科学大学附属中学校 二年 古川 晏 25
大阪府 大阪教育大学附属池田中学校 一年 川畑 理桜 26
兵庫県 兵庫教育大学附属中学校 二年 山口 倫佳 27
奈良県 香芝市立香芝東中学校 三年 松岡 あかり 28
広島県 広島大学附属福山中学校 三年 加藤 里桜 29
香川県 高松市立勝賀中学校 二年 横関 美南 30
愛媛県 新居浜市立南中学校 三年 椛島 采奈 31
福岡県 宗像市立自由ヶ丘中学校 二年 伊賀崎 望 32
福岡県 北九州市立熊西中学校 二年 宮部 みのり 33
佐賀県 佐賀大学教育学部附属中学校 一年 梅崎 知華 34
熊本県 嘉島町立嘉島中学校 二年 金子 夏歩 35
大分県 九重町立ここのえ緑陽中学校 二年 岩下 真理華 36
宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 一年 崎田 莉央 37
鹿児島県 学校法人池田学園池田中学校 三年 黒瀬 こころ 38
沖縄県 那覇市立寄宮中学校 二年 大城 奈子 39
アメリカ合衆国 財団法人ハワイ日本人学校レインボー学園 三年 遠藤 あかり 40

資料

第四十四回「全日本中学生水の作文コンクール」募集ポスター 41
第四十四回「全日本中学生水の作文コンクール」概要 42
第四十四回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿 43
第四十四回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況 44
第四十四回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移 45
第四十四回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式 46

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

一滴との出会い

徳島県　阿南市立那賀川中学校　三年　笠江　駿

幼いころから川が好きだ。ずっと眺めたり、石投げをしたり、浅瀬に足をつけ水の冷たさを体感したりするのが好きだ。また、「加茂谷鯉まつり」というイベントに参加して、五月晴れの大空に数百の鯉が悠然と泳ぐ姿を見ながら、梶取船で遊覧するのも大好きだ。

そんな、川が大好きな僕を小学校五年生の時に祖父が「那賀川源流探検ツアー」に誘ってくれた。このイベントに参加したことがきっかけとなり、僕の中に「川を楽しむ」視点に加え「水を守る」視点が生まれたように思う。あれから五年間、僕は自分にできることを考え、行動に移している。

ツアーでは、那賀川の水の原点の一滴を自分の目で見て手で掬い、自分の口に流し込んだ。また、一滴の水が滴る様子をイメージして作られた源流モニュメントの美しさにも感動した。この体験を経て、僕の中で何かが変わったように感じた。僕が毎日過ごす街を流れている一級河川「那賀川」。その流れを見るたびに、「源流の一滴一滴の雫が集まったものなんだ」と考えると何とも言えない気持ちになる。この感動が僕を新しいことに挑戦する原動力となっている。

小学校の卒業式間近の三月二日に一斉休校が決まった。三カ月間にわたる休校期間は僕が新しいことにチャレンジする貴重な時間となった。まず、中学生になる直前の春休み、地域の清掃活動に参加した。軍手をはいて小さな鎌を持ち、ひたすら草抜きを頑張った。子供の参加は僕だけで、ご近所の皆さんから「偉いね。助かるよ。」と声をかけていただいた。「ステイホーム」が多かったので久しぶりに自然と向き合い、地域の幅広い年代の方々との交流ができたことに幸せを実感した。

中学生になり、以前から気になっていた近所の川に不法投棄されている家庭ゴミをどうにかしたいと思うようになった。市役所に相談の電話をしたが、「待つだけではいけない」と思い、自分で月に一度の清掃をすることにした。なかなか全てのゴミを拾うことはできないが、一つでも拾うことが、川を守る小さな一歩になると信じて続けている。数カ月を過ぎた頃、散歩をしている人や車で通りかかった人から「ご苦労様。」と声もかかるようになった。僕がゴミ拾いをする姿が地域の人の意識を変えることに繋がればと思い、家族でお揃いの「清流を守る」のTシャツも作った。確実に少しずつだが、以前に比べ川に捨てられるゴミが減り、川の水が美しくなっていることを実感できるようになった。

昨年から、家の畑に野菜の種をまき育てている。小松菜や水菜の日々の成長に水は欠かせない。水やりをしながら、改めて水の大切さについて考えた。実際に自分が野菜を育てる経験をして、田植えの時期には自宅の田んぼで苗が育っていく様子を、これまでとは違った視点で観察するようになった。

中学生活もあと一年。インターネット上の百科事典・ウィキペディアに阿南市の歴史や観光情報を書き込む編集イベント「ウィキペディアタウンプロジェクト」に参加した。世界中の誰もが見ることができるので責任の重さを感じるとともにやりがいも感じられた。ウィキペディアで情報を編集する学びを通して、コロナでたくさんのイベントが中止や延期となっても、世界中に水の大切さを伝えることができると気持ちが前向きになった。

今日も新規感染者数が発表されている。コロナ禍の時代を生きている人々は、否応なしに命の大切さを痛感している。そして同時に命を育む自然の重みを実感しているように感じる。そういった今だからこそ、僕は気持ちを行動に移したい。自分もコツコツと地道な活動を続けるとともに、インターネットを通じて僕自身も活動した「水を守る活動」の素晴らしさを一人でも多くの人に伝えたい。自ら発信することで活動の輪を広げていきたい。そう決意し、確かな歩みを続ける決意だ。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

琵琶湖疏水を作られた皆さんへ

京都府　龍谷大学付属平安中学校　三年　鈴木　智尋

明治二十三年、琵琶湖疏水を作られた皆さん。今日、疏水は我々京都市民にとって欠かせないものになっています。生活で使っている全ての水は、琵琶湖から疏水を通って私達の元に届きます。また、桜や紅葉の名所として、観光スポットとなっていて、地域の人々の憩いの場にもなっています。

私が通っていた小学校は疏水のそばにありました。小学四年生の時、社会科見学で疏水のルートをたどったことがあります。その時、私はいつも飲んでいる水と疏水に対する思いが変わりました。滋賀県大津市にある長等山の麓から私達の住んでいる京都の間にはいくつもの山があります。疏水を通すには、その山々を越えなければいけません。皆さんが疏水を作られてから百三十二年が経ちました。現在は、技術が発展し、山の中に水路を通すことが簡単にできるようになりました。しかし、当時は大きな機械などがありません。ほとんど人の手で工事が進められました。その工事は危険なものではなかったでしょうか。現場で働いていた方々は、立坑から山の中に入り、シャベルで水路を掘り進めていました。その時、土砂崩れなどが起こったと思います。疏水を作るために十七人もの方が亡くなったと聞いています。現場で活躍された皆さん、命をかけて作ってくださった疏水は今、京都の生活の中心となっています。疏水と共にできた蹴上発電所は場所を変えて今も活動しています。皆さんの努力は令和になった今でもはっきりと見ることができます。

私は、いつでも安全でおいしい水が飲めることを当たり前だと思っていました。しかし、疏水のルートをたどり、疏水について深く知ったことで、いつでも安全でおいしい水が飲めることは決して当たり前ではないと気付きました。皆さんへの感謝の気持ちを忘れず、大切にしていきたいです。

京都は疏水のおかげで水に困るということはありません。また、日本全体でもいつでもおいしく安全な水を手に入れることができます。しかし、世界は違います。世界では約十人に三人が安全な水を手に入れることができていません。二〇五〇年になると世界人口の四割以上が深刻な水不足に陥るとも推測されています。水不足に悩まされている地域の多くは、経済的に貧しい地域です。水を引きたくとも、水路を通すためのお金がないというのが現状です。安全な水を手に入れるのに貧豊の差は関係ないと思います。

皆さんが疏水を作るためにかかったお金はおよそ百二十万円（現在の価値で約二百億円）と伝えられています。そのお金は国や市だけでなく、当時の京都市民が出していました。当時の市民は疏水に大きな期待を寄せていたのですね。疏水工事も費用が集まらなければできるわけがありません。水不足に悩んでいる人に水を届けるには、一人一人の小さな行動が大事だと思います。水不足の地域に水路を通すためのお金をみんなが少しずつ出すのです。私達には募金という手段があります。一人一人の募金額は少なくても、日本人全員が一円ずつ入れれば、総募金額は一億円を上回ります。一億円あれば、水不足の地域に水路を通す助けになるはずです。疏水を作る気運が高まった当時の京都は首都が東京に移り、活気を失っていました。市民全員が京都を元気にしたいという思いがあったから疏水ができたと思います。

私達は、国は違っても、同じ地球人として水に困っている地域に水を届けようという気持ちを持ちたいです。そうすれば、水路を作るためのお金が集まるはずです。皆さんは疏水を作り、京都を明るくしてくれました。次は私達が協力して水の問題を解決し、世界を明るくする番です。静かに流れ続ける疏水が私達にそう語りかけている気がします。

農林水産大臣賞（優秀賞）

繋ぐ水

新潟県　新潟大学附属長岡中学校　三年　齋喜　璃音

日本だからこその風景とはなんだろう。日本は他の国に比べると、小さな国である。しかし、その中にも「日本にしかない風景」というものがあると、私は思う。例えば、勢いよくしぶきをあげて落ちる滝や水鏡となり美しさを際立たせる湖、春の訪れを告げるたくさんの桜。その中でも私は、一面に広がる田んぼは日本ならではの美しい景色だと思う。田んぼは四季の移ろいを教えてくれる身近な絶景だと思っている。

日本では様々な食材が国外から輸入される中、我々の主食であるお米はほとんどが国内で作られ、日々の暮らしを支えている。特に新潟県ではお米がたくさん穫れ、さらにおいしいことで有名だ。それはなぜなのだろうか。

お米がおいしい理由とは、土や気候、そして水だという。その「水」に焦点を当ててみる。新潟県では冬に雪がたくさん降り、そして春にはミネラル豊富なきれいな雪解け水として川を流れていく。その川の水を使って米作りをするため、栄養たっぷりで清らかな水でお米を育てることができる。また、場所によっては湧き水があり、そのまま飲めるほどきれいな水もある。このように、新潟県はとても良い水質に恵まれている。おいしいお米がとれる秘密は、透き通るほどの美しさと栄養を兼ね備えた水があるからなのではないか。

さらに、お米は食べるだけではない。お米が育つ田んぼも美しい風景の一つだ。きっと田んぼの風景といえば、夏至の頃の一面の萌葱色がなびく様子や、稲刈り前の黄金にきらめく様子を思い浮かべるだろう。では稲が大きくなる前はどうだろう。稲が大きくなる前の景色も美しい。透き通った水の上に、まだ足首くらいの高さの若苗色の稲が植えられている。その透き通った水に、大きな空が映る様子や、堂々とそびえ立つ大きな山が映る様子もとても美しい。水鏡が広がることで、いつもの景色が新しい景色に見える。これもまた、美しい水があるからこそのものだ。

また、水鏡を使ったアート作品も生まれている。私はこの作品を見て、強く心を打たれた。新潟県十日町市にある「清津峡」をご存知だろうか。清津峡とは、日本三大渓谷の一つで、清津峡を挟んで切り立つ巨大な崖が、V字型の大渓谷を作っている。長年の月日をかけて生まれた大きな崖や、季節によって色を変える自然。春にはみずみずしい新緑が映え、冬には美しく雪化粧されるその景色に、心を奪われる。

その清津峡をさらに美しく際立たせるのが、「水鏡」である。そこには、大地の芸術祭の作品として「Tunnel of Light」という作品がある。その作品は、トンネルの中を歩いて進んで三箇所のポイントで清津峡を見ていく。そのトンネルの終点にメインの作品が待っている。トンネルの出口に水が張ってあり、そのトンネルから見える清津峡の景観を反転して映す水鏡が幻想的な景色を作り出している。

私は、水は「繋ぐ」ものだと思う。なにを「繋ぐ」のかというと、命を繋ぎ、自然と人とを繋いでいると思う。水は、私たちの一番身近にある自然だと感じる。そのまま飲んだり、料理に使ったりする。また、洗濯やお風呂など、衛生的に生活するためにも利用している。私たちの生活をつくってくれるのは水で、命を繋いでくれる。さらに、美しいと感じる多くの景色には水があるように思える。しぶきをあげる水や、揺れながら光り輝く水、白く姿を変えた雪など。水鏡に映ったなんでもないいつもの景色を見るだけでも、水が姿を変えた雪がつくり出す普段と違う風景を見るだけでも、人は感動できる。そんな自然と水がつくり出す美しい風景を未来に繋いでいくためにも、私たちの命を繋いでいくためにも、自然や水を守っていかなくてはならない。

経済産業大臣賞（優秀賞）

水と育む輪の中で永遠に

宮崎県　宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　三年　三浦　世来

『水』というものは私達の生活に欠かせないものであり、最も基本的なものだと私は思う。水がなければ植物は育たず、また多くの産業も大きな打撃を受けるだろう。蛇口をひねるだけで水が出て、トイレに水が流れる。そんな日々を当たり前のように過ごしている私達。

だが、水が与えてくれるものは恩恵だけにはとどまらない。度重なる水災害。そして世界的にも大きな問題となっているアフリカの水不足問題は、私達の生活を大きく一変させるものだと私は感じている。

三月二十二日。この日は国連が定めた「世界水の日」である。水がとても大切であること、きれいで安全な水を使えるようにすることの重要性について世界中の人々と一緒に考えるための日とされている。私はこの日、アフリカに住む子供達についての記事を多く見かけた。そのどれもが今の私の生活にはありうることのないものばかりで、大きな衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えている。アフリカで手に入る水は、茶色く多くの有害物質が混ざっており、その名も「命を奪う水」と呼ばれている。事実、年に三十万人以上の人々が命を落とす悲惨な現状が存在しているそうだ。そんな人々にとって唯一頼りとなるのが子供達だという。彼らは、一日の大半を水汲みに追われて過ごしており、毎日水の重さに耐えながら歩き続けている。また、多くの人が水を求め、争いが絶えないという。水が十分に手に入らないうえに、命まで奪われる可能性が高い地域での生活は、一刻一刻が想像を絶するものばかりだろう。

そんな中、私の心にある言葉が刻まれた。

「水は紛争の種だけではなく、協力のきっかけにもなりえます。」

この言葉は国連事務総長であるアントニオ・グテーレス氏が唱えたものだ。これを聞いた時、私は今の世界の現状を変えようと努力している人達を思い浮かべていた。なぜなら、以前この日に関連して見たサイトに「アフリカの水問題を解決するには、アフリカの技術だけでは難しい。でも、他の国の力を借りると解決に格段に近づく。」そう書かれていたからだ。水をきっかけに、世界中の人々が手と手を取り合い協力していく。私は驚きと共に自分もそういう人でありたいと心の底から思うようになった。

そう考えると、今の日本は格段に恵まれていると感じる。その要因としてよく言われているのが「ダム」である。私の父の前職は、ダムが通常に運行しているか整備することだった。そのため、台風や洪水などが発生すると、どんなに遅い時間でも逐一確認しに行っていた。そんなある日、私は父に誘われ石河内ダムを見学に行った。まだ幼くダムが存在する意味も知らなかった私にとって、その場所は新たな発見の連続だった。ダムには多くの水が貯まっており、一つ一つの設備が壮大なものだった。そんな中、私の頭に特に印象に残っているものがある。それは、ダムに内設されている小丸川発電所についてだ。そこでは揚水発電というものが利用されていた。揚水発電とは一度発電に使用した水を繰り返し使用するというものだ。今でも思い返すと感心するばかりだが、これもまた私達の生活の中では知り得ることはないのだろう。

『水』のもつ可能性は、どこまでも無限大だ。常に私達に寄り添い支え、何かを繋げるきっかけとなってくれる。今ある水に感謝する、これが未来を生きていく私達に必要なことなのだと私は思う。生活するうえで気づかない間に基になってくれる水は、それはそれは偉大だ。水に感謝することで、これから先生きていく人達に新たな可能性を届けることができる。水と育む輪の中で沢山の人が笑顔で過ごせるように。それが永遠に続くように。

国土交通大臣賞（優秀賞）

廃油石けんづくりを通して

愛媛県　高知県宿毛市愛媛県南宇和郡愛南町篠山小中学校組合立篠山中学校　二年　木下　そら

「廃油石けんを作って篠川を守ろう。」

私たちは、篠川の水質調査を通して、篠川の美しさを守るために、行動にうつしました。

私たちの学校は、総合的な学習の時間に、篠川の水質調査を毎年行っています。上流、中流、下流の三カ所で、水の温度を測ったり、パックテストをしたり、水生生物を調べたりして、篠川の水の美しさを確認しています。テストの時、私は篠川が汚れていないか少し心配になります。ここ二年間の篠川の水質調査の結果は、どこも水質階級Ⅰで、きれいな水が流れています。

そんな昨年の水質調査で、サワガニを発見しました。サワガニはきれいな水にしか住めない水生生物です。その中に、一匹だけお腹に四～五ミリメートルの子ガニを抱えたサワガニを発見しました。私は、卵からかえったばかりの貴重な瞬間だと思いました。どれくらい子ガニがいるのか数えようと思って、ピンセットでつまんで外しました。すると、母ガニから離れた子ガニが、するすると母ガニのところに戻ってしまいました。調べてみると、実は、サワガニは卵からかえると、ある程度の大きさになるまで母ガニのお腹で育つことが分かりました。これには私たちも先生も驚きました。私たちが見つけた小さな子ガニたちが、篠川で元気に育つために、少しでも篠川の美しさを守りたいと思いました。しかし、こんなにきれいな水も環境学習会で生活排水が流れていることを知りました。その中でも油が流れると、元の美しさに戻るまで長い時間かかると言われました。

そこで私たちが考えた方法が、家庭用排水で少しでも川を汚さないように、油を石けんに変える方法です。全校で話し合い、地域の人たちに呼びかけて、家庭の使用済み油を集めました。地域の人たちが協力してくださり、たくさんの油が集まりました。先輩は、深浦婦人会の方にお願いして、廃油石けんの作り方を教わってきました。婦人会の方たちは、地元の海を守るために、廃油石けんづくりを続けています。作った廃油石けんを販売しているのを聞いて、私たちも文化祭で販売しようと考えました。

教わった石けん作りに、米のとぎ汁を発酵させて使うというコツがあります。ご飯を炊くときに、米を洗って、何気なくとぎ汁を流します。しかし、米のとぎ汁も汚れた水だということに気付かされました。今までどれぐらい流して、川を汚していたのだろうと考えてしまいました。篠川に流した米のとぎ汁は最終的に海に流れます。婦人会の方は、上流の私たちに「汚れた水を流すな」とか言いません。何も言わず、自分たちにできることをしています。私たちはもう少し周りを気にかけなくてはいけない、知らなくてはいけないと思いました。米のとぎ汁は発酵させると、良い菌が増え、油汚れがよく落ち、消臭効果があるそうです。石けん作りにもぴったりなので、私たちが作る石けんも発酵した米のとぎ汁を入れました。目標の二百個を作り、買ってもらった人が自分でも廃油石けんが作れるように作り方の説明書も入れました。

文化祭が終わって、バザーで一つでも多く買ってもらおうと呼びかけました。地域の人や来てくださった人がたくさん買ってくれました。私たちの活動に協力してくれていることがうれしかったです。一緒に篠川をきれいにしてくれる仲間だと思いました。

今回の廃油石けん作りは、海に流れる油を篠川から防ぐきっかけになりました。しかし、篠川の美しさを守るだけでは、水の美しさは守れません。川と海は繋がっています。サワガニが多く生息するこの篠川を守ることが、海を守ることになります。これからも、水質調査を続け、水を汚さない方法を一つでも知り、文化祭など多くの機会で地域の方に呼びかけていきます。

環境大臣賞（優秀賞）

『水の惑星の未来は私たちが創る』

愛知県　豊橋市立本郷中学校　三年　中村　光里

「ひかちゃん、ほら新ものだよ！」

曽祖母がとれたてのキュウリを六本、しわくちゃに笑いながら手渡してくれたので、そのまま仏壇まで走って行ってお供えをし、手を合わせてご先祖様に報告した後、さっと水洗いしてパキッと食べる。最高にうまい。同居している曽祖母は九十二歳。耳は遠く腰は曲がっているが現役バリバリで畑仕事をしている。野菜作りの名人で何種類もの野菜を栽培してくれているので、うちで買うのはキノコともやしくらいだ。祖父母と両親は水耕栽培でトマト、田んぼでは米も作っている。食べ物にはほとんど困らない。本当に有難いことだ。

「令和になってから、コロナや災害や戦争で悲しいことばっかりだねえ…。」

曽祖母がテレビの前でつぶやいた。昭和初期の水道のない不便な暮らしと今、便利になった引き換えに環境破壊などが進み地球が悲鳴をあげている事を、経験から知っている重みのある言葉だった。

野菜作りにはもちろん、動植物が生きていくには、水が欠かせない。

水の惑星と言われる地球には水が豊富にある。しかし、私達が使える水の量はその中のたった0.01パーセントしかないのだ。今後世界の四十億人にも上る人が水不足に陥る可能性があるという報告がある。毎年百五十万人を超える子供達が安全な水の不足により感染症にかかっているというデータもある。安全な飲料水を得られず毎日4900人以上の子供が亡くなっているという過酷な現実、水源の上流国と下流国の水の使用を巡る紛争の頻発、海洋汚染、更には気候変動による水不足や水災害も相次ぐようになった。水の惑星が抱える水問題は沢山ある。

日本も例外ではない。気候変動による水災害だけではなく、実は「隠れた水不足」であるということだ。蛇口をひねれば安全な水が出るので水不足と実感している人はほとんどいないだろう。しかし、私達の生活の多くは海外からの輸入に頼っている。その工業製品や農作物等、それらを生産するために多くの水を使用している。つまりその生産に必要な水を他国に肩代わりしてもらっているということになるのだ。世界が水不足に陥れば、他国の水に依存していた私達の生活は甚大なダメージを受けるだろう。

曽祖母に昔の生活の様子を聞いてみた。家には水道が無く井戸の水を飲食に使い、雨水で食器を洗って、風呂の水で洗濯をしていたと聞いた。戦時中中学二年生だった時に、学徒動員で工場の寮に居た時、爆撃によって水道が使えなくなって困ったそうだ。他には台風が来る度に川が氾濫して大変だった等、水に関しての苦労話が次々と出てきた。

経験談を聞き、現在水不足で困っている国への支援と、今後予想されている世界的な水不足への対策はどうすれば良いか考えてみた。

海水淡水化技術、安全に各家庭や施設に届ける技術、使用した水をきれいにして自然に返す下水処理技術等、貴重な水を安全に循環させる技術を日本は持っている。この技術を提供し、水不足に悩む国を支援していかなければならない。

そして、私達が個人としてできることは、世界の水問題から目を背けずしっかりと見て知ること、日常生活での節水を心掛けること、できるだけ国産の製品や食品を使い自給率を上げること等である。小さな努力の積み重ねは大きな力になると私は信じている。

水の惑星の住人がその「水」の恩恵を共有出来るように、世界中の人々が一緒になって真剣に考え行動しなければならない。

先人たちの経験や知恵を継承しながら、世界中の人と手をとり合い、新しい未来を私達みんなで創ろう。

「幸せだね。」と言えるように。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

命ある水

岩手県　盛岡中央高等学校附属中学校　三年　澤井　佳恋

岩手県には、水の名所が多くある。龍泉洞のような観光スポットだけでなく、大慈清水、青龍水といった江戸時代から守り続けられている歴史ある場所、さらには中津川のように私自身の生活にも大きく関わっている場所まで、県内をみれば数えきれないほどだ。それと同じくらい、岩手県には全国的にも名の知れた文学者が多くいる。その中の一人として有名なのは宮沢賢治だろう。絵本や国語の教科書などで彼に出会った方も多いのではないだろうか。私自身も幼い頃から彼の童話や詩と親しみ、昨年は学校で宮沢賢治学習をしたことで、より彼の生涯や作品について深い知識を得ることができた。そんな岩手県で暮らしていると、ふと「あの先人もこの景色をみていたのだろうか」と考えることがある。例えば、滝沢市の柳沢湧口は宮沢賢治の詩集「春と修羅」の中で「あの柳沢の湧水」と詠われていることから、時代は違えど私たちのよく知る先人と同じ景色を見ている可能性も当然有り得るのだ。宮沢賢治は「銀河鉄道の夜」や「雨ニモマケズ」など沢山の名作を残しているが、「やまなし」をはじめ、水に関わる作品も数多くある。今回私が「水」というテーマと深く向き合うために参考にした作品は「青森挽歌」という詩だ。この詩は賢治の妹であるトシの死を詠ったものだが、この詩から「水」について考えたことがある。

それは「水」は私たち人間の生き方と、とても似ているということだ。詩の中で彼は、碧い寂かな湖水の面を見て「天のる璃の地面と知つて／こころわななき紐になつてながれる空の楽音」と表現している。ここには水の神秘的な様子がすべて表れているように感じた。水は山から川、海へ流れ、気体となって天に昇り、やがてまた雨として大地に降り注ぐ壮大な循環の中にある。その水たちの宿命は輪廻転生のようであり、私たちが持つ仏教的思想がそのまま形となって表れているように思える。しかし、私たちが本当に考えなければいけないのはこからだと感じた。水は循環する。水は一度目に見えない状態になっても、必ず元に戻ることができる、本当にそうだろうか。確かに、自然な流れでいけばその法則が正しいものであることは間違いないだろう。だが、例外として当てはまるのは人間がその流れを壊してしまった場合だ。例えば東北最大の河川、北上川。北上川は現在、水の汚れの程度を示す水質階級はⅠと最もきれいな階級に分類され、非常に多くの生物が生息している。一方で、つい四十年前の北上川の姿は今とは全く別の川にも思えるほど悲惨な光景であった。その原因は松尾鉱山から流れた坑廃水。当時の人々は生活にかかせない貴重な水資源を自らの手で破壊してしまったのだ。もちろん意図してその結果になったのではない。しかし、ここでもう一度思い出してほしいことがある。それは、宮沢賢治の作品から感じた「水も私たちも似たような運命をたどっている」ということ。それはつまり、水と人間の命の価値は対等ということであると考えた。水の運命を変えてしまうということは水の人生そのものを狂わせてしまっていることと同義ではないだろうか。しかも、その結果はやがて私たちに返ってくる。これらのことを踏まえると、「水」という存在がどれだけ貴重であるかがよく分かるだろう。

水の無い生活を一度でも想像したことはあるだろうか。私には到底考えられない。川も湖も海も無い地球。それは果たして地球なのだろうか。雨が降らないということは虹を見ることもない。そんな人生は楽しいのだろうか。水が生きているから私たちも生きている。水は私たちの生きがいをつくっている。かつて先人たちが見た岩手の景色を守るため、水への感謝を忘れずに生活していきたい。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

私の断水体験記

和歌山県　和歌山県立向陽中学校　二年　福田　純伶

「急いで家中の水をためて。」
と母が言った。
「わかった。」
と家族それぞれ思い思いの場所に散らばる。
ほんの数分前まで私たちは平凡な日曜日の夕方をのんびりと過ごしていた。ふいに友人達から連絡がきた。
「断水になるみたいだから、水をためておいたほうがいいよ。」
という内容だった。急いでテレビをつけると紀ノ川にかけられた水道橋が崩落した映像が映し出されていた。
私たちの住む和歌山市は真ん中に紀ノ川があり、浄水場はすべて対岸にある。その水を運ぶ唯一の橋が崩落したのだ。私は正直焦った。頭が混乱し、不安が込み上げてくる。私はただそこに立っていた。その時、母の一言ではっと我にかえる。
「そうだ、今のうちに水をためなければいけないんだ。」震える心をなんとか落ち着かせながら私は蛇口をひねった。勢いよくジャアアーッと水が出た。「よかった、まだ水が出る。」という安堵感。
水をどんどんためていく。手分けして、容器も探す。まずはお風呂。そしてやかん、お鍋、水筒、タライ、バケツなど。それが終われば洗濯機や食洗機を回したりしながら、おかずやごはんを大量に作って冷凍したりした。
「これから、水がなくなると何が困るんだろうか。」と想像しながら対策していると、普段から、水を使わなければ困ることだらけであるということに改めて気づいた。作業は夜遅くまで続いた。
翌日、蛇口をひねると、水はチョロチョロと少なくなっていて、ツンと薬のような匂いがして、これからは、蛇口の水が使えないことを知った。顔を洗うとき、溜めた水を少し汲んで洗った。朝ごはんは、洗い物が出ないように紙皿にラップをかけたものにごはんを入れて割り箸で食べた。トイレはためた水で流した。対岸にある学校では蛇口をひねると水が出たので私は不思議な気持ちになった。帰宅すると、また水が使えない世界。
お風呂は沸かせないので水で洗ったら冷たくて震えた。次の日からは夕方高速に乗って祖母の家に行き、お風呂に入らせてもらい、ポリタンクで水を入れてもらうことになった。母はペットボトルの水を買いに行っても売っていなかったと話していた。断水当日に水をインターネットで注文したが、注文が殺到していたようで断水が終わるまで届くことがなかった。そんな中、友人が遠くから水を届けてくれたり、近所の小学校に給水車が来てくれたり、井戸水を自由にくませてくれるお家があったり、沢山の優しい気持ちにも感謝しながら過ごした。この水道橋崩落は、全国ニュースでもとりあげられていた。私は、毎日「早く終わらないかなぁ。」と思っていた。ところがそんな苦しい生活が一週間続いた。
「今日から水が出ます。」という放送が流れて父が蛇口をひねったとき、濁った水が勢いよくとびだした。
「蛇口をひねると水が出る」そんな普通だと思っていたことがどんなに待ち遠しかったことか……。水が濁らなくなってから、コップいっぱいに入った水を一気に喉へ流し込んだ。その時に飲んだ水は、今までで一番おいしくてあたたかい味がした。私はほっと胸をなで下ろした。そして私が飲んだこの一杯の水が届くまでたくさんの方々が昼夜を問わず働いて努力してくれたおかげであることを改めて考えた。工事をして、橋の上に水道管を設置してくれた方々。浄水場で水をきれいにする為に働いてくれている方々。今まであたり前にあると思っていたことは、決してあたり前でなかったことに気づかされて、感謝の気持ちでいっぱいになった。この気持ちを忘れずに水を大切に使っていきたいと思った。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

見える水と見えない施設

三重県　高田中学校　二年　谷野　由依

みなさんは普段、自分が飲んでいる水のことについて意識したことはありますか。テレビのニュースで水について考えさせられるようなことが増えてきたように感じます。アフリカのある地域が慢性的に水不足になっていたり、また、台風による川の増水で被害が出たりしているニュースを見て、水について全く意識したことがないという人はあまりいないと思います。私自身、今使っている水の有り難さを考えたことは何度もあります。

実際、蛇口から出てくる水の奥にある、見えない水道管について考えたことはあまりありませんでした。しかし以前、祖母の家の近くの水道管から水が漏れていることをたまたま知りました。その水道管は橋の横にあり、見える位置でした。祖母は私をそこまで連れて行ってくれ、私はとてももったいないと感じました。その後、修理を市役所に要請し、直してもらったそうです。

なぜ破損してしまったのか父に聞くと、老朽化だと言われました。前に橋の老朽化の記事をインターネットで読んだことがあったので、同じようなことが起きているのではないかと考え、厚生労働省の資料で調べました。資料によると、高度成長期に急激に普及した水道の更新時期が現在来ているそうです。水道管路の法定耐用年数は四十年ですが、施設の更新が進まないために、老朽化が進行し、漏水等の事故が増加し、年間二万件を超えているそうです。さらに、水道管路の耐震化はあまり進んでおらず、大規模災害時に断水が長期化するリスクもあるそうです。

私の家の周辺では、今のところ漏水という言葉はあまり言われていません。しかし、地中にある水道管はもしかすると今この瞬間も壊れてしまっているかもしれません。また、三重県は南海トラフ地震が今後起きた際に多くの被害が出るといわれている地域であり、あくまでデータが全国のものだとしても水が安定的に手に入れられるまでに長い時間がかかるだろうということが予想できます。大きな綻びができてしまう前に、根本から変える必要があり、私たちもそれに協力する必要があることを感じました。

大きな綻びの例が、去年和歌山市で起こった事故だと思います。紀ノ川に架かる「水管橋」が崩落してしまい、多くの人々が断水による影響を受けることとなってしまいました。どんなに最新技術がはやっても、生活の基盤が一つなくなるだけでこんなに不安定になってしまうのかと衝撃を受けました。

しかしまた、私たちの生活を支えている水道の奥にも縁の下の力持ちは存在しています。浄水場やダムです。私は小学生の時、社会見学で浄水場に行きました。整然とした手順で水を安全にしていくのを見て驚いたということもありましたが、一番不思議に感じたのはもっと郊外の方だと思っていたのに、案外市街地に近く、私の世界のすぐ近くに潜んでいたということでした。教科書でいくら密接に結び付いていると説明されても納得できなかったことが分かりました。

その浄水場が水を取り入れているのは川なのです。川から家の蛇口までが淀みなく連携して初めて、水を活用することができるのです。それは逆に言えば、どこかがおかしくなると水を全く活用できないということでもあります。河川の護岸工事も浄水場の点検も、私たちに無関係だとは言えないし、無関係だから無視していいともましてや言えない問題です。目を反らさず、地域の問題が何であるかを知ることから始めたいです。

シャワーズ賞（優秀賞）

山の水にはかみさんがいる

新潟県　上越教育大学附属中学校　三年　井口　慶香

「山の水にはね、かみさんがいるんだよ。」

祖母は私にそう言った。ちょうど私が五歳の時だ。「かみさん」とは「神様」のことだ。方言というほどのものではないが、祖母の周りの人たちは、一様にこの表現を使う。何だかゾクゾクするような緊張感漂う表現だ。幼い私でさえも、畏れのような、憧憬の念とでもいうような、不思議な感情に包まれた。

山の水にはかみさんがいる。そう語る祖母の手には、小さなサワガニがそっと握られていた。愛らしい姿とは対照的に、こちらをギロリと見る様子は、喩えようのない凛々しさがある。赤黒い甲羅があんなにもキラキラと太陽光を反射させるのは、山の水を纏っていたからなのか。触れてはならぬもののような気がして、私は急いでそれを水の中に還した。サワガニは逃げるそぶりすら見せず、そして、水の冷たさをものともせず、ただ悠然と山の水の中に佇んでいた。

働き者の祖母の手は、岩のようにごつごつとしながらも、つやつやと光っている。山菜の灰汁で黒ずんだ指先はデッサンしたようにしわの陰影を際立たせる。祖母は長年、中山間地の棚田を、祖父と一緒に守ってきた。農業へのＡＩ導入が取り上げられ、機械化が当たり前になったとはいえ、棚田での稲作は、平地の稲作の何十倍もの苦労があるという。効率性重視の大きな機械は、細いあぜ道には厄介な問題にもなるらしい。棚田の美しさを守るため、入念な畦塗りや真夏の草刈りは欠かせない。日本の原風景という棚田だが、その景観維持がどれだけ難儀かなど、思いを馳せられる人はどれくらいいるだろう。

私が暮らす地域は、大雪にてんてこ舞いになる冬を経て、雪解けを迎え、太陽の季節に辿り着く。誰もが冬を忘れる頃、渓流は溢れんばかりの勢いを増し、棚田を潤す。一番上の田に引き入れた水はじっくりと、一番下の田まで優しく覆う。青々とした稲が風になびく棚田の姿は素敵だ。また、刈り入れ前の黄金色に輝く稲穂もまた素晴らしい。それでもやはり、私が好きなのは、田植え前、たっぷりと水が張られた、あの静寂漂う棚田の姿だ。新緑の季節、水面に空を映した緑のダムは、やがて、街を透り大地に染み渡る水となる。

山の水にはかみさんがいる。迷信のような非科学的な言葉に、真実性を感じるのは、そこに生きてきた祖母が語る言葉だからだ。祖母は山の水の偉大さを、生活の中で実感し、自然のすぐ傍に自分の日常を置いていた。洗顔や入浴、飲水など、私の生活にも、水は大きく関わっている。融雪で大量の水を使い、プールや温泉などのレジャーにもなくてはならないものである。私の周りにあるのは、活用する水であり、便利な水である。私に見えていたのは、「生活のための水」であり、自分たちが「生きるための水」の姿である。

しかし、祖母には、私の捉えとは確実に異なる、根源的な水の姿が見えている。それは地球の拍動を支える水である。もし、これが真実だとしたら、水の変化は地球の姿を変え、水の枯渇は地球の鼓動を止めるかもしれない。

山の水は、微妙なバランスの上にあるのだと思う。川の源である山の水が枯渇すれば、大きな問題を引き起こし、下流域に住む多くの人々の生活に影響を与えるかもしれない。山の様子が変われば、きっと何か大きな変化が起こるだろう。自分の生活の中だけの、自分だけの問題にせず、目の前にある自然にしっかりと向き合うことが大切なのだと思う。

山の水には、確かに、かみさんがいる。

ある時言った祖母の言葉が、今でも私の耳から離れない。

「サワガニ、また見せてあげたいんだけど、随分といなくなっちゃってね。なんか、山の水、おかしくなってきとるんさ。かみさん、おこってるんだろうかねぇ。」

中央審査会特別賞（優秀賞）

みんなが幸せになる洋服を

茨城県　茨城大学教育学部附属中学校　三年　金沢　青空

洋服に関することで驚いたことがある。洋服を作るために水が使用されているのだ。

例えば、コットン製のＴシャツ一枚を作るために二七二〇リットルの水が、ジーンズ一本を作るために最大で一〇八五〇リットルの水が使われている。これは、洋服の色を染めるための染料を洗い流したり仕上げたりする工程や、その製品を作るための原料となっている植物などを育てるために、水を使うためである。

このように、繊維製品の生産には大量に水が使われ、その量はなんと年間で九三〇億立方メートルである。これは、オリンピックの水泳プールに換算すると、三七〇〇万杯分に値する。私はこれを知ったとき、水の量が多すぎるあまり、想像もできないくらいだった。

また、洋服に関する問題は水の大量消費だけではない。河川の水質汚染だ。衣類の染色と仕上げの工程で生じる廃水が、世界中の廃水のおよそ二〇％を占めている。この廃水の中には、窒素や殺虫剤が含まれており、その土地の生活用水を汚染していることになる。

洋服を作るために、水が使われたり、汚染されたりすることによって、人の命が奪われていると言っても過言ではない。人々の生活に使われるはずであった水が洋服の生産に使われ、生活に使える水が限られる。また、きれいで安全な水を手に入れることが困難になり、汚染された水を飲まなければならないような状況になる。

限りある水資源が大量に消費されていたり、汚染されていることはもちろん問題だ。だが、私が最も問題視する点は別のところにある。今飲む水に困窮し、健康を害したり、命を落としたりする人たちが世界中に大勢いる現状の中で、水の使い方の優先順位を改めなければならない点である。確かに、オシャレをしたり、新しい洋服を買ったりすることは私たちの心を豊かにし、満たしてくれる大切なものの一つである。だが、限りある水資源の使い方を今一度考えるべきではないだろうか。私が普段着ているものが、どこかの人々の水問題をさらに悪化させているかもしれないということにとても悲しくなった。

ショッピングモールに出かければたくさんの洋服が並ぶ。テレビを見ればファッション特集が組まれている。洋服は、私たちの生活にとって当たり前にあり、必要なものだ。だからこそ、一人一人が洋服と水の問題について知識を深め、考え行動していかなければならない。具体的にはどんなことがあるだろうか。

例えば、購入する製品を見直すことだ。コットン製のＴシャツを買う際に、オーガニックコットンを選んだり、ジーンズを買う際に、ローウォーターという手法を使ったジーンズを選んだりするだけでも、水問題に貢献することができる。オーガニックコットンを選べば従来の綿より九一％も使用する水の量を削減することができる。ローウォーターという手法のジーンズでは、使用する水の量を六一％も削減できる。

日本には、伝統的な技術に藍染めや草木染めなどがある。染料は自然に還る素材でできており、水質汚染につながることはない。このような技術に再度注目し、行動を起こすことも重要だと思う。

私たちの身につけている洋服の多くが発展途上国で生産されていることや、先述した水に困窮する人々のことを考慮すると、一刻も早く改善点を見つけるべきだ。

そのために私たちがすべきことは、正しい知識を得るために学ぶことから始まる。そこから、一人一人が行動することで、本当の意味でみんなが幸せになる洋服が世の中に広まるだろう。

入選

水が持つふたつの顔

北海道　下川町立下川中学校　二年　三浦　かんな

水は、人の命を守るものであり、また命を奪うものでもある。私は、二つのケースを例に、水について私が考え行動したことを書こうと思う。

「み、水、、みず」うめく妹に、母は、ずっとペットボトルのキャップに水を入れて少しずつ飲ませていた。たった六百五十グラムの水が失われただけで、こんなにも人が弱ってしまうなんて。

妹は、送迎バスに取り残されて、二時間半後に発見された。意識はもうろう、顔が真っ赤で熱もあがっていた。何より、ずっと水を欲しがっていた。症状からすると、妹が失った水の量は四～五パーセント。体重が十三キロだった妹の身体からおよそ六百五十グラムの水が失われた。夜もうなされて元気になるまで何週間もかかった。今となっては妹も元気だが、この出来事は、私たちに水と命について考えるきっかけをくれた。

私たちが生きていくのに必要な水の量。これは、体重が多ければたくさんの水が必要になるが、体重一キロ当たりに必要な量は年齢が低いほど多くなる。一歳だと、百二十～百三十五 ml/kg、六歳だと九十～百 ml/kg の水分が一日に必要になる。

私たちは、喉が渇けば自分で水分補給をすることができる。しかし、小さい子どもはそれができない。お年寄りにも難しい人もいるだろう。まわりにいる人が、お年寄りや小さい子どもに気を配っていくことが大事だと思う。脱水症の予防には、「こまめな水分補給」が重要だ。私たちは、常に水によって命を守られているということを自覚しなければならない。

二つ目のケースは、水難事故。毎年、水難事故によって多くの子どもが命を落としている。着衣水泳の教室に参加したが、服を着た状態でいきなり水に落ちると、浮いた状態を保つのがとても難しいことがわかった。妹のような小さい子どもは、浮き具がなければ浮くこともできなかった。川や海に近づかなければおぼれることもないが、川や海には、不思議な形の石があったり、砂の感触が面白かったり、本では学べないことがたくさんある。

これらの気づきから、私はライフジャケットステーションを設置する活動を始めた。人間は、肺に空気が入っている場合でも最大で人体の五パーセントしか海に浮くことができない。しかし、ライフジャケットを正しく着用していれば、生存率が四割から九割にまで上がる。また、水辺へ出かける時は、事前に天気や水辺の情報を調べて必ず大人と出かけることが重要だ。水辺へ出かける時の注意点を掲示し、ライフジャケットを無料で貸し出す場所を作るために、募金を集めたり、お小遣いを貯めている。実現まで、あと少し。

妹の事故をきっかけに、私は水の大切さと恐ろしさを知り、特に子ども達と子どもを守る大人に安全な水との付き合い方を知ってもらうことが必要だと感じた。残念ながら、私たちは当事者になるまで大切なことに気づきにくい。

今年は、一人でも、水の事故で亡くなる人が減るように、そしてきれいな水環境を守るために私ができることを一生懸命頑張っていきたい。

入選

ウォーターパワー

岩手県　盛岡市立下小路中学校　二年　佐藤　奈穂

私の学校の近くを流れている中津川は、とてもきれいな川です。

三年前、私は中津川の水質調査を行いました。実際に中津川へ行って、どのくらい水がきれいなのか調べました。汚い川だと、ヒルや外来種のエビなどがいますが、くんだペットボトルの水にそれらはいませんでした。川では鮭を見ることができ、ペットボトルには、きれいな川だけにいるエビなどが入っていました。私たちの大切な中津川はきれいな川だ、と分かったと同時に、盛岡の誇れる川なのだ、という思いを強く抱きました。

中学校の通学路が川沿いなので、私は毎日中津川の景色を満喫して登校しています。晴れの日は、川の水面に雲が映り、鳥たちが元気に戯れ、川のせせらぎがとても心地よく感じられます。どんよりした曇りの日は、川が少し寂しく感じられますが、川の流れが速いところから懸命に浅瀬に行こうとするカモたちの姿を見ると、「頑張れ」と応援したくなる気持ちと、「今日も平和だな」とほっこりした気持ちが生まれます。

中津川は、四季折々の景色も楽しめます。春は桜が咲き、動物たちが川でくつろぐ姿を垣間見ることができます。そして、川のせせらぎが、新しい学年に進級して緊張している私たちの背中を押してくれるような気がします。夏は、木々の葉が緑に色付き、日の光が水面に反射して、ダイヤモンドのようにキラキラと輝いています。秋は、木の葉が赤や黄色に染まり、鮭たちがうろこを輝かせて川をのぼっていきます。冬は一面雪景色となり、白鳥たちが川の中を楽しそうに泳いでいるのです。一年を通して、川の近くに咲いているたくさんの種類の花や、楽しそうに泳いだり獲物を捕らえたりしているカモやサギを見ることができます。

私は、そんな中津川の「水」から、毎日パワーをもらっています。川のせせらぎを聞くと、モヤモヤしていた気持ちがすーっと水の流れとともに流れていくような気さえします。カモの親子が必死に川岸まで泳ごうとしているのを見ると、あの親子のように頑張らなくては、と気合が入ります。

その日は、すっきりと晴れた日でした。中津川の景色を見ながら歩いていた私の目に、岩手山が見えました。まだ頂上に雪が少し残っている岩手山。その手前に美しく咲き誇る八本の桜。そして快晴の空を反射した中津川がありました。この美しい光景から、私は、嫌なこと、心配なこと全てが吹き飛ぶくらいのパワーをもらいました。そして岩手山は、この中津川に多くの恵みをもたらしていると実感しました。

小学校の林間学校で登山をしたとき、山の頂上で、私の人差し指くらいの水路に水がちょろちょろ流れていたことを覚えています。先生はこう言いました。

「こんなに少ない水だけれど、山を下りたら、この水路が川になっているのだよ。だから、ここは始まりの川なんだ。」

もしかしたら、岩手山の頂上で流れていた川が、中津川にも流れているかもしれません。そして、その水が、植物や動物を元気にし、育んでいるかもしれません。

（水は多くの道を冒険して、たくさんの生命を豊かにしている。素敵だな。）

心からそう思います。

私たちが普段、当たり前に使っている水。水は、植物や動物、私たち人間にエネルギーを与えてくれる、ウォーターパワーを持っています。盛岡を流れている中津川が、ウォーターパワーで植物や動物、私たち人間を豊かにして、ずっときれいな川のままで私たちを見守ってほしいです。そのために、私たち一人ひとりが川を汚さないように心がけ、中津川を愛し、未来へ受け継いでいきたいです。

入選

緑が育む美味しい水

宮城県　仙台市立郡山中学校　二年　増川　智穂

普段何気なく飲んでいる水道水。私は今まで、特に美味しいとも不味いとも感じてこなかった。しかし二年前の夏、家族と一緒に福島県の磐梯山に登った時、水に対する意識が変わった。

あの時に飲んだ水の味が忘れられない。磐梯山に流れる、弘法清水という湧き水の味だ。それは冷たくて澄んでいて、登山で疲れた体にぐんぐんとしみわたるような美味しさだった。水はこんなにも美味しいものだったのか。

なぜ、湧き水はあんなに美味しいのだろう。そんな疑問を抱き、湧き水の美味しさの理由について調べてみた。そして初めて、水の美味しさには「森林」が深く関係していることを知った。

日本に降る雨の中には、ちりや汚れ、汚染物質などが含まれている。まず、雨が森林に降って地下にしみ込む。そして、土の小さな隙間を通ってろ過されたり、土の中の微生物に汚れを分解されたりすることで、汚染物質が除去されて水が浄化される。さらに、土や岩の中のミネラルがバランスよく溶け出し、まろやかな飲み口の美味しい水になって、湧き水として出てくる、というしくみなのだそうだ。

私はこのことを知り、心底納得した。うっそうと広がる、深い緑の森林。あの磐梯山の大自然に育まれた弘法清水は、確かに美味しく感じるはずだ、と。弘法清水の美味しさの秘密は、磐梯山が抱く美しい森林にあったのか。

しかし、今、世界各地の森林は危機的な状況に置かれている。一分あたり東京ドーム約二、四個分、一時間あたりの量に直すと東京ドーム約百四十四個分の木が切り倒され、毎年およそ七百三十万ヘクタールの森林が地球上から消滅している。世界中で伐採される木の本数は毎年約百五十億本、などという話もある。

この先もこのままのペースで木々を伐採し続けていったら、近いうちに地球から全ての森林がなくなってしまうのではないか。いや、なくなるのは森林だけではないだろう。そこに暮らす多様な生物、きれいな空気、それらも全て失うことになる。そして、水。森林の力で浄化された、清潔で美味しい水も、得られなくなるのではないか。

また、森林に振る雨のほうにも、人間の活動が影響を及ぼしている。自動車の排気ガスや化学肥料などによって有害物質が発生し、その影響で酸性雨が降るようになっている。どんなに森林に水質浄化機能があったとしても、後に湧き水となる雨そのものに有害物質がたくさん含まれていれば、除去しきれないものが出てくるかもしれない。

森林や雨は、湧き水の安全や美味しさと深く関係している。弘法清水を含め、日本各地の、そして世界各地の水の美味しさを守るためには、水を育む自然環境をよりよいものにしていくことが重要だと思う。

そのために、私たちは何をするべきか。例えば、森にゴミを捨てないこと。木から作る紙の利用を減らすために、再生紙で作られた製品を使うこと。排気ガスを減らして酸性雨を防ぐため、近距離の移動は徒歩にしたり、自転車を使ったりすること。一つ一つの取り組みは小さいが、今、私たちにできることを少しずつ積み重ねていく、それが環境や水を守る第一歩になるのだと思う。

森林に降った雨が地中で浄化され、湧き水として再び地表に出てくるまでには、四百年ほどもかかると言われている。私たちが今、美味しい水を飲めるのは、四百年の間、森林を守ってくれた祖先たちのおかげだろう。では、今私たちが美味しい水を育む緑を守るということは、四百年後の地球に生きる子孫たちの水を守ること、ひいては幸せを守るということにも繋がっていくのではないだろうか。

入選

水は自然からの贈りもの

福島県　会津若松市立一箕中学校　二年　満田　栞音

私の両親は、江戸末期に創業された会津味噌の専門店で働いています。名物の味噌料理や地元のお酒を楽しみに、多くのお客様が来店します。お店で食事をするお客様は、口をそろえて「会津はおいしい食べ物がたくさんあって、何を食べようか迷ってしまう。」と話してくれるそうです。母は「会津は自然にも気候にも恵まれているから、きれいで豊かな水がある。そのおかげでおいしい米も酒も味噌もできるんですよ。」と話しています。

私の住む会津は山に囲まれた盆地で、きれいな川が流れ四季の景色も楽しめる、自然豊かなところです。冬になるとたくさんの雪が降り積もり、厳しい寒さの日々が続くこともあります。冬が終わり、真っ白な磐梯山も雪が解ける頃になると、その雪解け水がゆっくりと時間をかけて、私たちのところへ巡ってきます。長い長い時間をかけてきれいな水が届けられる、そう思うと、私の知らないところで、大きな自然が私たちに与えてくれるものの大切さがわかります。

会津若松には自然や食べ物、歴史や伝統工芸などたくさんの魅力があるから、多くの観光客が訪れるのだと思います。それらを見えないところで支えているのが、自然がくれる豊かな水です。

会津に来た人たちが、米がおいしい、日本酒がおいしい、味噌がおいしいと言って喜んでくれるのも、会津盆地に降り積もる雪が解けて豊富な水になり、その水が田んぼに流れて稲が育ち、おいしい米ができるおかげです。その米で日本酒や味噌を仕込み、会津を代表する食べ物がつくられていく。そう思うと、厳しい冬も毎日のように降り続く雪も、今までは寒くて冷たくて嫌いだと言っていたけど、私が好きな自慢の会津であるためには必要なものだったのだと受けとめられるようになり、少し見方が変わってきました。

今、コロナの流行によって、会津に訪れる人が少なくなってきています。両親の働いている店にも、行きたいけれど行けないという声も多く、自慢の味を楽しんでいただくことができません。でも、こんなときだからこそ、これまで大切に守ってきた伝統の味を残していかなければならないのだと思います。いつか安心して観光旅行ができるようになったとき、「会津はおいしい食べ物があるから何回も来たいです。」と言ってもらえるように、地道に準備しておくことが大事なのだと思います。

でも、おいしい米も酒も味噌も、すべては水にかかっています。おいしい食べ物を喜んで食べてもらうためには、会津の水を大事にしなければならないのです。

私が通う中学校の隣には、浄水場があります。猪苗代湖の水を原水とする会津若松の水は、この浄水場できれいにろ過され、私たちの家庭へと届けられています。最新の維持管理システムが導入され、私たちが安全な水を使えるようになっているのです。

自然の水は日々めぐっています。川や海の水は蒸発して雲になり、そこから雨や雪が地上へと降り注ぎ地下に染み込みます。それがやがて川や海に流れ込み、また雲になりを繰り返しています。そんな自然の流れの中で、私たちがゴミや生活排水で水を汚している。やがて浄化しきれない水が自分の元へ返ってくるような事態が起きるかもしれない。そう考えたら、ゾッとしてしまいました。水を守ることが、会津の食文化を守り、観光資源を守り、何より私たちの生活そのものを守ることになるのです。

会津の大きな自然が、私たちに与えてくれているものの大切さに気づいた今、会津で暮らしている私たちが水を大切にすることで、会津の良さをこれからも伝えていけるのだと思います。

入選

水に感謝をこめて「いただきます」を

東京都　渋谷教育学園渋谷中学校　三年　沖田　樹音

二〇十六年十二月二十二日、新潟県糸魚川市で大規模な火災が起きた。糸魚川市には私の祖父母の家がある。火災の発火場所は祖父母の家のすぐ向かいだった。私は母とテレビの火災中継を震えながら見ていた。

「もし、おばあちゃんの家が燃えたらどうしよう…。」私の心の中は不安でいっぱいだった。危機一髪、祖父母の家は燃えずに済んだ。この前、糸魚川に帰って、火災の復興途中を見た私はふと思った。「もし水がない国で火災が起きたら、どうやって消火するのだろう。」

私たちにとって蛇口をひねれば綺麗な水がでてくるのが当たり前だが、サハラ以南のアフリカ諸国では全く当たり前ではない。世界中で六億六千三百万人の人々が安心して飲める水がなく、その半数近くが、サハラ以南のアフリカ諸国に集中している。安心して飲める水もなく、代わりに泥水を飲むしかない国で大規模な火災が起きたら…と考えると、恐ろしくて仕方なかった。現在、地球温暖化が進み、アフリカの熱帯雨林火災が問題になっている。森林火災が起きても消火するのに使える水が日本のように沢山なく、消火できずにどんどん火が広がっていく…。森林が燃え、家が燃え、資産が燃え、人が亡くなることもある。アフリカにもっと多くの水があれば、森林の火災が起きても燃える面積は少なく済むはずだ。そして、森林破壊が少し止められるかもしれない。安全な水があれば泥水などの危険な水を飲んで亡くなってしまう人も減るはずだ。私は以前、水があるのが当たり前で水のことを深く考えることはなかった。しかし、今はちがう。水は私たちの生活だけでなく、地球の未来も担っているのだと思うと、水がどれほど偉大で大切なのか、水への感謝の気持ちが押し寄せた。

二つ目の話に移るが、私は学校でプラスチックの使い方や環境問題について考える団体に所属している。その活動の一環として、毎週月曜日と金曜日に学校の周辺のゴミ拾いをしている。渋谷にはたくさんのゴミが落ちているが、落ちていた。ゴミの中で一番印象に残ったのが、まだ半分以上水が残っているペットボトルだった。「まだ飲めるのに、使えるのに、どうして捨てるの。」と私は思った。安心して飲める水がほとんどない国の人は、綺麗で透き通っている水を決してポイ捨てしないだろう。

私は水と環境の為に小学生の頃から続けていることがある。それは外に出かけるときは常に水筒を持っていくことだ。水筒があれば出先でペットボトルを買うことはめったにない。ペットボトルを作るのに殺菌や洗浄の過程で大量の水が使われている。毎日ペットボトルを買っている人がいたら今すぐマイボトルに変えてほしい。プラスチック削減にもつながり、綺麗な海の「水」も保つことができる。

このように私たちの生活と水は常に関係がある。私たちが生きるためには、「水」が必要なのだ。手を洗ったり、水を飲んだり、お米を炊いたり、みそ汁を作ったり、シャワーを浴びたり…。全て生きるのに必要なことだ。また、医療現場でも注射や治療薬、手術などで水はなくてはならない存在だ。火事の時に火を消せるのも水しかない。

偉大な存在である水に感謝を伝えたい…。だれもが簡単にできるのは水を飲むだけでも、水の前で手を合わせて、「いただきます」と言うことではないか。ご飯を食べる前は皆、「いただきます」と言うが、水を飲むときは言わない。でも安心して水を飲めるのが当たり前ではないからこそ、今日から命の源である「水」を飲む時に「いただきます」と言おう。心からの感謝をこめて。

入選

森を育てて水を守る

神奈川県　聖園女学院中学校　一年　永峰　由埜

今にも雨が降りそうだ。休日には両親とよく散歩をする。今日の目的地は家を出る前に決めていた。まっすぐ川を目指して歩き出す。

私が住む横浜市保土ヶ谷区には横浜市唯一の渓谷といわれる陣ヶ下渓谷公園がある。小さな渓谷だが街の中とは思えない自然豊かな場所だ。渓谷に行く前に住宅街の中を流れる帷子川沿いを歩く。川底と両岸をコンクリートで固めてある。目の前の川は水量も多く流れも速い。川底は見えず、天気のせいか灰色がかっていておせじにもきれいとは言えない。私が「川」と言われて思い浮かべるのはこんな川だ。コンクリートで深く掘り下げてあるので下りていくことはできないが、「とてもさわれないな」と思いながら目的地を目指す。陣ヶ下渓谷公園の入り口にたどり着くと急に周囲の気配が変わる。木々がうっそうとしげり、空気はひんやりと冷たい。しめった土をふみながら下へ下へと斜面を下りていく。近くを通る環状道路の車の音が段々と水音に消されて小さくなる。谷の一番下まで下りると川のせせらぎはどうどうと鳴っていた。水は澄んでいて思わず手をのばしてすくった。水道水のキンとした冷たさとはちがうやわらかい感触だった。この水はどこから来るのだろう。

水源について調べると陣ヶ下渓谷の上流では雨水のほかに、少しだが生活排水も流れこんでいることがわかった。なぜこんなにきれいな水が流れているのか。自分がふみしめたふかふかとした、しめった土はスポンジのような役割を果たしている。雨水を森の土が吸い、長い時間をかけて湧き出た水を流す。大雨が降っても一気に川に流れ出ることがないので洪水が起こりにくく、反対に雨が降らずに乾燥しても土の中にためられるので水がなくなることもない。森林が「緑のダム」といわれるゆえんである。森林の役割はダム機能だけではない。森の土にしみこんだ水は、いくつもの地層を通り抜けてろ過される。森の土は自然の浄水場の役割もはたしている。

先に歩いた帷子川付近はもともと水害の多い地域であったため、コンクリートで周りを固める工法を用いて川のはんらんを抑えてきた。しかしこのような川は水不足の時期になると汚れやすい。本来ならば、川底の岩や砂に水草が生え、微生物がつき、それをえさにする小動物や魚が生息する。川は水を運ぶだけでなく、流れの中で動植物を育て、浄化しながら水をきれいにする。人を守るための治水工事が結果的に水を汚染していることに気づき、ゆううつな気持ちになった。

しかし、人の手が入ることがすべて悪いとは言えない。この反省を生かして横浜市栄区の独川では水辺の自然復元工事を行い、自然の姿を取り戻しつつある。これもやはり人の手によらなければ実現しなかったことだ。

陣ヶ下渓谷も雨水や生活排水が川に流れこみ、渓谷を通ることによって水を浄化している。しかし森も手入れをしなければ育たない。この渓谷は以前は荒れた森だったそうだが、公園化され、月に二回、自然愛好会の方々が植物の調査や雑木林の手入れを行い、維持に努めている。これまで川や海を守るにはどうやって水を汚さないようにするか、ということに目を向けてきたが、きれいな水を守るには森を育てていくことも大切だとわかった。

実際のところ、森を育てて川の水がすぐにきれいになるわけではない。大事なのは時間がかかっても私の子どもやそのまた子どもたちがきれいな水の恵みをうけられるようにすることだ。気をつけなければいけないのは、自然に手を加えるのではなく、自然が本来の姿に近くなるように「ほんの少し手伝う」ことだと思う。自然愛好会のボランティア活動は高校生から参加できるそうだ。それまでこの景色をずっと心にとめていようと思う。森を抜けると雨が降り出した。今日の雨はゆううつじゃない。

入選

大切な水を守るために

富山県　高岡市立牧野中学校　一年　湊　遥真

生き物が好きな僕と祖父は、よく海や川に生き物を探しに行った。きれいな透き通った川にはメダカがたくさんいて、そこを二人の秘密にして毎回行くのを楽しみにしていた。祖父が「昔はもっとたくさんメダカもいてな。今じゃホームセンターに売っとる時代やもんなー。水は生き物も生きていく上で大切にせんなんもんやちゃ。」と、気持ちよさそうにスイスイ泳ぐメダカを見ながら話をしてくれたことがある。また、家族で立山の昆虫博物館に行ったときは、近くに山のわき水が流れていて、両手ですくい飲んだ。汗だくで暑い夏だったこともあり、口に入れた瞬間、家族みんな顔を見合わせて「おいしいね。」と思わず笑顔になるくらい、冷たくて本当に美味しかったことを、今でも覚えている。どれも楽しい思い出だ。

きれいな水が必要なのは、人や海に住む生物も同じで、その水の大切さを知る為にも調べて考えてみようと思った。

僕が当たり前に飲んでいる水。世界では水道水が安全に飲める国は約五パーセントで、日本はこの五パーセントである。水がどれほど安全かは、国によってバラバラなのだ。

カンボジアの首都プノンペンでは、日本の北九州市上下水道局等の協力によって、水道の蛇口から直接飲むことができる安全な水が二十四時間供給されるようになり、それは「プノンペンの奇跡」と呼ばれている。日本では当たり前の日常が奇跡だとは、何とも言えない気持ちになった。僕は水泳を習っていたが、終わった後に飲む、あの喉をうるおしてくれる美味しい一杯の水も、当たり前ではないのだと改めて思った。

では、日ごろからどのようなことが、僕たちにはできるのだろうか。

生活している中で、日本ではお風呂の使用量が一番多いようなので、お風呂の残り湯を洗濯や洗車、植物への散水に使うことも、節水方法の一つである。僕の家には雨水タンクがあり、雨水を利用して花壇に散水したり雪を溶かしたりしている。今まであまり関心が無かったが、役立っているということがわかり、良い工夫だと知ることができた。北陸地方は降水量が多く、この方法が土地柄に合っているので取り入れている、と僕の家を建てたハウスメーカーの人から聞いたことがある。身近にも工夫していることがあるのだな、と関心をもつことができた。

日本は雨がたくさん降るからといって安心はできない。日本特有の急勾配の地形により、海や川へと一気に流れ出てしまうからだ。それを防ぐためにダムがあるが、安全な水への再利用はほんの一部だ。今後持続的に水不足におちいらないように考えると、僕たちが生活で最大限利用できる水の量は、世界平均の二分の一以下である。二〇三〇年までに、七億人が深刻な水不足で住む場所を追われるおそれがあるというから驚きだ。

チリの中央部では、気候変動と降水量の減少で湖が消えて干ばつに見舞われ、牛がわずかな草を食べていたり、動物が息絶えたりしている様子を見てゾッとした。遠い国だけの問題ではないと、初めて深く考えさせられた。

一つ一つの節水量はわずかなものもあるが、どの方法も、毎日続けることで一ヶ月、一年と長い目で見るとかなりの量が節水できるし、僕自身、家族でも何か一つでも始めてみることが大切だと思う。

人も、僕の好きな生物も、みんなが心豊かに幸せな将来を過ごせるように、当たり前だが毎日水を「大切」に使うことを忘れず、自然の恵に感謝して過ごしたい。地球の水は無限ではない。とても貴重な資源なのだから。

入選

源清流清

岐阜県　垂井町立不破中学校　二年　矢橋　悠

テレビで樹氷を研究し続ける教授を追跡取材していた。樹氷とは極寒の地域に生えている樹木に霧状の細かい氷が吹き付けられて凍る現象だ。真っ白に凍てついた枝は、天気が回復した朝の陽にキラキラと神秘的な美しさを見せていた。

防寒具を着込んだ教授は冬の間、あちこちの森林で樹氷を削り取って採集した。研究室に持ち帰ると氷はすでに水になっていた。教授はろ紙でそれをこした。しばらくすると、水が通過したろ紙の上は不純物で真っ黒になった。ぼくは驚がくした。原野で純白の光を放っていた氷がこんなに汚れを含んでいるなんて思ってもみなかった。教授は言った。ろ紙の上にたまる物は年々増加していると。そしてこれはＰＭ二・五や光化学スモッグの原因、更には自然界では分解されないプラスチックごみだと。プラごみが海洋汚染の問題になっているのは知っていたが、こんなに山深く、標高の高い場所にまで飛んで来ている事実が信じられなかった。ぼくが生活しているこの場所にも空中を浮遊する有害物質が無数にあるということだ。鼻フィルターでろ過しなければ、たちまちぼくの肺は真っ黒だ。想像していくと、新型コロナウィルスもマスクを通り抜け、すぐ鼻の先まで来ているようで恐かった。

樹氷のテレビを見たのと同じ頃、ぼくは新聞で「ＳＤＧｓ」という言葉に出会った。日本語では「持続可能な開発目標」と訳される。樹氷の調査はＳＤＧｓの目標の中にある「一三　気候変動に具体的な対策を」への問題提起になる。そして「一四　海の豊かさを守ろう」、「一五　陸の豊かさも守ろう」の取り組みを促す。結果、むだな資源消費にストップがかけられれば、「一二　つくる責任　つかう責任」の遵守となり、最終的には「一一　住み続けられるまちづくり」を実現化できる。十七個もの目標達成は大変だと思ったが、それぞれつながって解決できる。でも、と、ぼくはすっきりしなかった。大事なのは分かるが、守るのが当たり前のこと。取り組みのアピールは「ほめて」という偽善的な呼びかけのようで違和感を感じた。

そんなぼくのモヤモヤを取り払うような出来事があった。祖母の家に遊びに行った時のことだ。ちょうど家の排水と下水をつなぐ工事中で、いつも車を止めている庭が作業場になっていた。日曜日で作業をしている人はその日いなかった。祖母の話によると職人さん達はテキパキ仕事をこなし、工事後、見えなくなる箇所でもとても丁寧に作業してくれているという。それにしては、庭のあちこち大事な道具が点在していて話の印象とかけ離れている。前日に急いで帰ったのだろうか。その場所を見比べるうちに謎が解けた。職人さんは「わざと」道具を置いて帰ったのだ。

道具は庭木の根っこや水道メーターのそばなど傷つけてはいけない場所の目印だった。そばで作業をしていない職人さんでも大事な道具が置いてあれば注意する。職人さんの本能を活かした理にかなった注意喚起の方法だと気付き、ぼくはすごく感心した。注意書きしたり撤去する手間もいらない上、その分、作業に集中できる。無事故で作業を終えるのは当然のことだけれど、みんなが油断せず一つの方向を向くのは、なかなか困難だ。無理や負担なく結果が出せる秘策の一つを発見した気がした。そして、ＳＤＧｓはこの延長にあるべきではないのかと思った。

海外の国は遠く離れた異国の地なのではなく、ぼくが住む日本と海や空でつながっている。環境汚染も他の国で誰かが起こしているやっかいな現象ではなく、実は自分たちが加害者かもしれない。みんなに報告するために目標を守るのではなく、自然に良くなる方向へ舵取りできるといいのにな。水の惑星、地球を守るのはきっとそういう事だと思う。

入選

私たちの大事な水

静岡県　不二聖心女子学院中学校　二年　石川　怜奈

私の住む三島市は、「水の都」と呼ばれ、湧水を誇る街です。市内の川の水はとてもきれいで、毎年夏には暑さを避ける多くの子供たちや観光客でにぎわいを見せています。私も幼い頃、姉や祖父と一緒に虫かごや虫取り網を手に出かけ、桜川の生き物を捕まえては観察していました。桜川の中をのぞくと、さまざまな形の石や見たこともない生き物が多くいて、それは本当に不思議な光景でした。また、家の近くにある楽寿園の小浜池が満水になり、その周りの豊かな緑とともに見る景色は本当に美しかったです。

しかし今、三島市の水は、「開発」という人間の行動によって壊されようとしています。それは三島駅南口の駅前再開発事業です。高層マンションやホテル、駐車場などの建設が計画されているそうです。

開発によって街は豊かになります。それでは何が問題なのでしょうか。開発と水にはどのような関わりがあるのでしょうか。調べてみると、現在計画中の高層ホテルは、十三階以上、高さにすると三十メートル以上もの建物になることがわかりました。それだけの高い建物を建てるためには、基礎工事といって地盤を十メートル以上掘削する必要があるのです。地面を十メートル以上掘る、この作業が、三島市の湧水の元となる地下水を断水させる可能性があるのです。この建設によって、私が幼い頃から見ている楽寿園の小浜池や、多くの人々の努力によって生まれ変わった源兵衛川にまで危機が迫ってしまいます。美しい「水の都」ならではの大切な魅力が壊されてしまうかもしれないのです。

私は、この問題に対して三島市は地下水の安全保障を調べているかが気になりました。調べてみると、市による地質調査や分析、地下水の保全対策が行われていることがわかりました。しかし、自然は人間の力でははかり知れないとても大きな力であり、人間がすべての可能性を理解するのは不可能ではないかと私は思います。現在静岡県では、同じ理由でリニアモーターカーの建設にも反対運動が起こっています。地下水の安全が完全に保障されるわけではないのです。

美しい三島市の自然を壊すくらいなら、開発をしないありのままの三島市のほうが魅力的だと私は思います。私は三島市の美しい湧水や川を守りたいです。開発してもし、水に影響が出なかったとしても、この開発をするのか、しないのかの判断は、三島市の郷土愛に大きく影響すると思います。

昨年から今年にかけて、それまで元気よく流れていた川の勢いがなくなり、枯れてきているように感じます。その川は、毎年秋から冬にかけて水量が少し減りますが、夏になってもあまり増えない川の水に、私はとても悲しい気持ちになりました。水が枯れたため、水の中で元気に遊んでいた子供たちや大好きだった生き物も少し違って見えます。少し前に建設されたホテルによる工事で、驚くほど景色が変わりました。確かに、ホテル内にはおいしいレストランもあり、利用する人の笑顔も多く見られます。しかし、その陰で、自然が壊れていることや、三島市の誇る水の命が絶えそうなことを、もっと三島市の人に知ってほしいです。

ホテルや高層マンションの建設によって人や経済が動き、市が豊かになることはあります。しかし、それは自然との共存、自然と市と、どちらも豊かになる方法で行ってほしいと心から願います。私は三島市の命の水を絶やすことがないように、今述べたような自分の考えを周囲に広げ、共有していきたいです。また、自分の生活の中でも、「水」という存在に対して改めて考え、毎日感謝を忘れず大切に使っていきたいです。そして、私たちの誇りである大事な水を守れるよう、力を尽くしていきたいです。

入選

学びから行動へ、行動から美しい川へ

静岡県　静岡市立両河内小中学校　九年　山崎　倖来

いつも私たちが見ている水は、透き通っていてとても綺麗な水です。飲んでも美味しく、両河内は水に恵まれている地域だとよく感じます。しかし、ある体験を通じて、私のその考えはかなり変わりました。

それは、小学生のときの総合の授業で、興津川の水質検査をしたことです。検査をする前は正直、「きっと良い結果になるだろう」と思っていました。私たちが普段使っている水、飲んでいる水はとても綺麗で、たくさんの生きものも住んでいるからです。

しかし、その結果は驚くもので、良い結果ではなかったのです。幼い頃から身近だった興津川の水、両河内の水に誇りをもっていたこともあり、信じられませんでした。

それまでの私は、「美しい川と生きものを守る」「水を未来まで繋ぐ」というと、かなり大きなこと、難しいことだと身構えてしまっていたところがありました。でも、私たち一人一人にも、少なからずできることがあるはずです。ごみをポイ捨てしないことを気をつければ、川が汚れることを少しでも防ぐことができます。他にも、魚をとりすぎないことや生活用水を工夫して使うことなどができると思います。そのように考えることができるようになったのは水質検査をしたからです。

水質検査以外にも、小学生のときには浄水場の見学に行き、水についてのお話も伺いました。中学生になってからは、鮎について興津川漁協の方に質問をさせていただいたことがありました。総合の授業以外にも、国語の授業で「水を守ること」に関する説明文を読んだり、道徳の授業で「生きものと環境」について学習したりして、水についてより深く、広く考えることができたと思います。実際に川や水に関わっている方のお話には、とても多くの学びがありました。自分が知らなかった水のことや、水の生きものに関する知識を得ることができました。水や川について考えるには、まず「知識を蓄える」ということ、そして、「現状を知る」ということが必要だと思うので、どれもとても有意義な時間となりました。

特に、漁協の方からお話をしていただいたり、質問に答えていただいたりする中で、私たちは「興津川と鮎」について多くのことを知り、考えました。漁協の方とリモートでお話をさせていただいたり、鮎釣り体験をさせていただけたりしたのは、両河内に住んでいるからこそだと思います。私たちは、興津川という綺麗な川が近くにあることで、たくさんの貴重な経験をさせていただいています。まずはその環境と、環境を整えてくださる方に感謝をしたいと思います。

そのように、水について、川について、さまざまな経験を通して学ばせていただいている私たちには、これからの興津川の環境を守り、未来へ繋いでいく責任があると考えます。そして、興津川に住む鮎などの生きものが、これからものびのびと命を育んでいけるような川にしなければいけない。そう思っています。そのためには、「この川は私たちだけのものではない」と考えることが重要だと思います。美しい川にしか住めない生きものがいるということを知ってからはさらに、その考えが強まりました。

私が水と両河内について、興津川について思うことは、「私たちは興津川を大切に思うからこそ、守り続けていかなくてはいけない」ということです。貴重なこの水を誇りに思うことはもちろんとても大切なことだと思います。でも、そこで終わりではなく、「さらに綺麗で誇れる川にするにはどうするべきか」「未来に綺麗な川を残すために何ができるのか」を考え、実行することが何よりも大切なのではないかと私は思います。

ごみを捨てない。なるべく節水をする。そういった小さな心がけや行動が重なって、これからも美しい川が続くことを願います。そして、私たちの誇りである大事な水を守れるよう、力を尽くしていきたいです。

入選

循環する水が運ぶもの

愛知県　名古屋市立若葉中学校　三年　薛　知明

私のお気に入りの場所の一つである名古屋市立鶴舞中央図書館。本と同じぐらい楽しみなのが、図書館中庭の湧き水を見ることだ。

一昨年の夏、図書館で開かれた都市の水循環について学ぶ講座に参加した際、図書館中庭の「つるのめぐみ」と名づけられた湧き水を見学した。一分間に約百リットルもの水が湧き出ているそうで、木の樋を勢いよく流れる透き通った水に手を浸すと、ひんやりして気持ちよかった。水が湧き出ている場所は複数あったが一部、水たまりになっているところに油のような膜があるのが気になった。最初はどこからか流れてきた油が入りこんでいるのではと思ったが、講師の先生によると、バクテリアによって酸化した鉄だというので驚いた。湧き水が伝い落ちているコンクリート壁が茶褐色に変色しているのも、鉄の成分によるものだという。雨として地表に降った水が、大地という天然のろ過システムを通過する間に鉄を含むということをそのとき初めて知った。そして、苔の先から水が浸み出しているところの周辺には大量の巻貝が群がっていた。

昨年、理科の授業で紹介された、気仙沼の漁師さんの植林活動を書いた『森は海の恋人』という本を読み、水に含まれる鉄についての理解がさらに深まった。上流に豊かな森林がある川とつながる海では、カキやホタテ、海藻がよく育つ。それは、植物プランクトンが豊富だからで、川が運んだ鉄のおかげだ。水に溶けている鉄はそのままだと酸化しやすいが、腐葉土に多く含まれるフルボ酸と結びつくことで、植物プランクトンに吸収されやすいフルボ酸鉄となる。鉄分を取り込んだ植物プランクトンは爆発的に増え、海の生態系を豊かにすることにつながる。

いま私の体内にある鉄は、そのように川で運ばれ、海の恵みが体に蓄えていたものかもしれない。人体では体の隅々まで張りめぐらされた血管を通って鉄などの栄養分が運ばれていくが、この地球も同じだ。目に見える河川ばかりでなく地下水も大地の隅々にまで流れ、生き物に不可欠な様々な成分を運んでいる。そのように地球上の多くのいのちを支えたのち、水は蒸発するが、やがて雨となり、再び大地に戻って海をめざす新たな旅に出る。

人は大人になると生活習慣病などを心配して健診を受け、血液中のコレステロールや鉄分などの数値を気にしている。地球にとっての血管である川や地下水についても、人間の活動、特に生活習慣によって水質や水の循環に悪影響を与えてしまっていないか気にかけることが大切だ。自分の体は自分だけのものだが、大地を流れる水は、地球に生きるすべての生き物のものだからだ。

本来、地面に浸み込んだ雨水は、湧き水として川や池の水量や水質を安定させ、植物を通して蒸発することで、周囲の気温を下げる働きをしていた。しかし、都市化された街では、地表がアスファルトによる舗装やコンクリートの建築物に覆われてしまい、雨水が浸透しにくい場所が多くなっている。その結果、川や池の水質悪化、ヒートアイランド現象、洪水など、人間だけでなく動植物にとっても命や健康にかかわる様々な環境問題が引き起こされている。最近では、雨水を浸透させるアスファルト舗装も広がってきているが、私たち一人ひとりが今すぐできることとして、雨水を打ち水として使うなど新たな生活習慣を身につけ、身近な水環境やそこに棲む生き物たちの健康にも関心を持つようにしたい。

また、図書館で借りた本を返却ポストに返すように、水の返却場所も決まっている。使用した水は排水口、雨水などは地面に浸みこませるか排水溝へ。水循環がスムーズに進むように、私は受け取った水を正しく返還する生活をこれからも続けていきたいと思う。

入選

「那智の滝から考える水資源」

三重県　高田中学校　二年　山本　沙羅

和歌山県那智勝浦町にかかる巨大な滝、「那智の滝」。その大きさは、一段の滝としては落差日本一となるほどです。熊野那智大社とともに有名な観光地となっており、連休などには多くの人が訪れます。私も、この「那智の滝」を見た経験があります。透きとおった水が大迫力で注ぎこんでいる情景は、今でも忘れられません。

さて、この「那智の滝」の美しい姿、実はそこには、森も大きく関わっています。一年生のとき、国語の授業で、『森には魔法つかいがいる』という文章を読みました。その文章では、「森と川と海は一つである」と述べられていました。まさに、「那智の滝」でも同様で、「那智の滝」の周辺の森が、水源のかん養、水質保全、土砂流出の防止、いやし効果や地球環境の保全などの多くの役割を担っています。

しかし、「那智の滝」を取り巻く森には、危機が迫っていました。それは、その森の多くが民有地であり、経済林となっていることです。もちろん、森の所有者はきちんと管理をされています。ですが、経済林であるため、伐採も懸念されるのです。過去には、森の伐採が原因で滝の水の枯渇の危険にまで及んだこともあったといいます。

では、どうやって森と滝を守るのでしょうか。普通、莫大な広さの森を所有・管理しようと思うと、多額の費用、人手……考えただけでも気が遠くなります。しかし、那智勝浦町は諦めませんでした。那智勝浦町では、民有林を買収して管理するために、「那智の滝源流水資源保全事業基金」という取り組みを始めたのです。最初は寄付がなかなか集まりませんでしたが、パンフレットの作成や募金箱の設置、そしてふるさと納税などを活用することによって、徐々に寄付が集まるようになりました。そして、今も滝の水源を守るための取り組みが行われており、多くの企業がそれに協力しています。

たくさんの人に支えられて、今日も流れ続ける「那智の滝」、その存在には、数えきれないほどの努力があったのです。那智勝浦町の元町長であった堀さんは、

「百年先の森づくりへ夢を持って取り組む。町が元気になったと言ってもらえる施策を進めたい。」

と話しています。正直、私はこの文章を書くまで、「那智の滝」が環境問題に直面していることや、水源を守る取り組みが行われていることを知りませんでした。文章を書く際に「那智の滝」についてたくさん調べ、初めて知ったことが多々ありました。そして、自分に感動を与えてくれた「那智の滝」を、少しでも支えたい――そう考えました。「たとえ高額なお金を寄付できなくても、行われている取り組みをいろいろな人たちに発信すれば、みんなの水資源として守っていけるのではないだろうか。」私は、これから、「那智の滝」の水資源の問題について、みんなに伝えていきたいと思います。そして、「那智の滝」以外の水資源の問題にも目を向けてほしいです。現代では、環境問題というのは、とても身近なテーマです。だからこそ、自分の好きな自然についてよく知ることが、環境問題から守るのにとても大切なことなのです。

「那智の滝」で見た、水の美しいカタチを、水への理解を深めることによって、多くの人と共有し、みんなで守っていきたいです。

入選

知り続ける心

滋賀県　大津市立日吉中学校　三年　石本　栞菜

私は琵琶湖が好きだ。なぜなら、小さな頃から、琵琶湖やその近くの川でよく遊んでいたからだ。兄妹や友達、近所の人と、かにとりや水遊びをしたこと、年上から年下まで年齢など関係なしに色々な人と関わり合って遊んでいたことは、私の中で良い思い出として残り、私が琵琶湖に興味を持ち、琵琶湖を守るためにどのような取り組みが行われているのか調べるきっかけにもなった。その中で最も印象に残ったのは「魚のゆりかごプロジェクト」だ。

そもそも琵琶湖は、その周辺にある水田のおかげで古くから豊富な水産資源に恵まれていた。では何故、水田が豊かな水産資源を得る上で、重要な役割を果たしてきたのだろう。理由は主に二つある。

一つ目は、琵琶湖に生息するニゴロブナなどの固有種が、水温高く、稚魚のエサとなるプランクトンが豊富であるからだ。

二つ目は、琵琶湖で問題となっているブラックバスなどの外来魚には、固有種のように水路を遡上し、水田の中に入ってくる習性がないため、卵や稚魚が外敵に襲われる心配をする必要がないからである。

このように水田は琵琶湖を守るために必要不可欠なものだった。しかし、昭和四十年以降、生産性の向上や農業経営改善のために、ほ場整備が進められた。その結果、農業が効率的に行えるようになったが、その一方で産卵を目的に遡上していた魚が水田で産卵することが不可能となった。この問題をどうにかするために排水路に魚道を設置し、排水路の水位を階段状に水田の高さまで上げた。こうすることで再び、魚が水田に産卵できるようになった。この他にも琵琶湖を守るための取り組みが行われている。

私は琵琶湖の多様な生態系を守るためには、その周辺の環境にも目を向けていくことが必要であると思った。また、このような取り組みをより多くの人々に伝えていき、興味を持ってもらうことが必要だと感じた。しかし、私達がすぐ行動に移せることは少ないと思う。だから一人一人が自分にできることを考え、実行することが、みんなで琵琶湖を守り続けていくために重要ではないのだろうか。そのためにまずは、みんなに琵琶湖の良さを知ってもらわなければならない。

例えば、カヌーなどの波が穏やかな琵琶湖だから楽しめるスポーツを地域で行ったり、学校でも琵琶湖を守るための取り組みやその取り組みを行っている人たちの思いを知る機会を増やしてみてはどうだろうか。そうすれば、琵琶湖に対しての関心が少しでも湧いてくると思う。また、このような取り組みを通して、地域の人々との交流が増え、地域間の人々のつながりが、もっと深まっていくだろう。

私自身、まだまだ琵琶湖について知らないことが山ほどあるので、もっと知識を増やしていこうと思う。また、自分の身の周りにある水をいつまでもあるものだとは思わず、その水をどう守り続けていくのかもう一度しっかりと考えてみようと思った。

入選

おいしい水

京都府　京都先端科学大学附属中学校　二年　古川　晏

私の祖母の生まれは京都の杉坂という自然豊かな山の中です。私は、夏になるとよく川遊びをしてすごし、楽しい思い出があります。そこは京都府の木、北山杉の産地でおじが林業の仕事をして暮らしています。おじの家に行く通り道に京都市が一望できる所があります。そこを通りすぎると杉坂の船水という水が流れている場所に車を停めて水をくむ人や飲んでいる人をよく見かけます。私も飲んでみると、おいしくて驚きました。この水は、昔からのわき水が流れているとおじに教えてもらいました。おじの家も山からのわき水を通して、生活の水に使用しています。水道のじゃ口から出るわき水はとても冷たいです。このわき水をもたらす山の傾斜には北山杉が育っています。なぜ、こんなにもおいしい水が流れてくるのかを考えてみたいと思うようになりました。

山には、様々な生き物が住んでいます。木の間を歩いてみると、鳥のさえずり、虫の声、木々のざわめきや足もとをガサゴソと動く姿の見えない生き物の足音などのたくさんの音が聞こえてきます。表層にある枯葉をめくってみると様々な虫を見つけることができます。山の木々は、寒暖や乾湿の差が比較的少なく、また水分とエサが豊富なため、土壌生物にとっては天国のような環境です。そのような環境を作り出しているのが水です。山の保全環境を健全に守るためには水の存在は欠かせないものなのです。

山の木々と水は、私たち人類が地球上に登場するずっと前から互いに関係を築いていました。北山杉の山に降った雨水は、土の中で浄化されて汚れが取り除かれると共に土や石に含まれているミネラル分を吸収します。それが杉坂のわき水のおいしい理由だと思いました。

山の多い日本は、台風や大雨などで土砂崩れが発生しやすい国土環境にあります。また近年は、集中豪雨により土砂崩れに関するニュースやその被害を目にする機会も増えています。おじの家の前の山も土砂崩れがあり、木がなげ倒されて崩れた跡を私も見ました。また土砂崩れが何度もあるため、植林した木が流されてしまい、植林を行うことが困難になってきています。北山杉も生産者の後継者不足のため木を管理することが難しくなってきています。

命の水をおいしく何不自由なく飲めるのは山の手入れをしているからだとおじが言っていました。山は、大切に保護、保全、そして将来のために再生することが大切です。日本各地でおいしいわき水が飲める所がたくさんあります。それは、その水を守っている人々がいるおかげです。これからも、おいしい自然の水が飲めるように私たちみんなで山を守り、自然と共生することを学んでいく必要があると思いました。

入選

冷たい井戸水と安全な水道水

大阪府　大阪教育大学附属池田中学校　一年　川畑　理桜

水といって一番はじめに頭に浮かぶのは、祖父の家の庭にある井戸の水だ。小さい頃は毎年夏休みになると祖父の家に遊びに行っていたのだが、庭でスイカやきゅうりを冷やすために井戸の水が惜しみなく使われていた。

夏の暑い日、水道から出る水はぬるく、氷を入れなければとても飲む気にはなれなかったが、井戸の水は長く手を入れていられないほど冷たかった。私は何度も飲んでみたいと思ったのだが、祖父から飲むことを禁止されていた。

井戸水を飲んではならない理由について祖父にたずねると、「水道の水は消毒されているから安全だけど、井戸の水は色んなバイ菌がいるんだよ。」と言われた。約四十年前まではその井戸の水は祖父の家の隣にある小学校で飲料用の水として使われ、毎日何百人もの小学生が飲んでいたらしいのだが、今では祖父の家でスイカを冷やしたり庭の花へ水をやったりすることのみに使われている。

私は夏の暑い日のひんやりした井戸水が大好きなので、井戸水について調べてみた。すると、井戸水にはデメリットとメリットがあることがわかった。井戸水のデメリットは、水を地中にある水脈から直接汲み上げているため、水道水のような処理はされておらず、雑菌などの人間にとって有害なものが含まれている可能性があるということだ。しかし、定期的な水質検査を行うことで、安全に井戸水を使うことができることがわかった。井戸水のメリットは、一年を通して水温が一定であることや水質によっては温泉水やミネラルウォーターのような成分が摂取できることなどがあった。メリットの中で私が一番興味深かったのは、災害などで断水や停電になった時に井戸水が使えるということだ。災害時については、二〇一一年の東日本大震災の時には水道が復旧するまでの約三週間、井戸水が人々の生活を守るため活躍したらしい。最近では電気を使って水を汲み上げる井戸が多いようだが、災害時のことを考えると電気を使わず手動で水を汲み上げることのできる手押し井戸ポンプを残していきたいと思った。

井戸水について調べるうちに一番身近にある水道水について改めて調べてみようと思った。現在、水道の普及率は九八・〇％でほとんどの家庭に水道水が供給されている。水道水は私たちにとって最も身近な水であり、飲むことや料理、洗濯、入浴など生活の様々な場面で使われている。

水道水について小学生の時に市の浄水処理場へ見学に行き、どのようにして水が私たちのところまで安全に届けられているのかを学習した。水道水は主にダム湖や河川の水を浄水処理場で沈澱、ろ過によって不純物を除去したあと、塩素を加えることで殺菌消毒して飲んでも安全な水に変えているということだった。調べてみると最近では通常の浄水処理に加えて、高度浄水処理を行うところも増え、オゾン処理や粒状活性炭処理、生物処理などを行うことにより、従来の浄水処理では除去しきれなくなった物質も取り除き、よりおいしい水道水をつくることができるようになったということだ。このように安全な水道水が普及しているおかげで私たちは健康に暮らせていることがわかった。

今回、井戸水と水道水について調べることでそれぞれの良いところを知る事ができた。周りを海で囲まれ、山地も多い日本に住む私たちは自然からたくさんのものをもらっているが、同時に自然災害も多く起こる。常に安定して安全な水を私たちに届けてくれる水道水に感謝するとともに災害時に私たちを助けてくれる井戸水も大切に守っていきたいと思った。また、今後私はどんな井戸の水でも飲料用として使える仕組みをつくりたいと考える。

入選

おいしさの秘密

兵庫県　兵庫教育大学附属中学校　二年　山口　倫佳

ここは坂越湾。静かな海の波の音とサワサワと木々がこすれる音をかきけすように
「ジ・・・。ジジジジ・・・・。ジュッ！」
とお腹を刺激するおいしそうな音。
磯の良い香りが辺り一面に漂う頃、両親がジャンケンを始めた。どちらが帰りの車の運転をするか、ビールを飲む権利の獲得戦だ。姉たちはスマホで写メを撮り始めた。小さい頃は末っ子の私が被写体だったが、今は被写体がカキに変わった。少し残念だ。海のミルクと表現されるだけあって、プリプリとうま味が詰まった身だ。のど越しにツルンと通る食感がたまらない。おもわず
「おいしい！」
と大きな声。
「おいしい！すごいね！」
と連呼する私にお店のおばちゃんが
「ここは生島と千種川が流れ込んでいるから特別に美味しいカキができるのよ。」
と教えてくれた。
おばちゃんが店の奥へ入っていくと、すかさず父が話し出した。
「なあ。なんで生島と千種川があるとおいしいカキができると思う？」
普段は寡黙な父だが、理系なだけあって理科に関わることになるとたんに饒舌になるところが面白い。私が黙っていると、父が
「海の食物連鎖の起点はどこ？」
とさらに質問をしてきた。
「植物プランクトンに決まってるやん。光合成で増えるねんで。」
と教科書に書いていた図を思い浮かべながら自慢気に答えた。
「そうだね。じゃあ、スペシャルヒント！植物プランクトンの成長や増殖するためには光合成だけが必要なの？」
と父が楽しそうに質問をたたみかけてきた。
「窒素とリンだけど・・・・。あっ！腐食連鎖が関係してるのやね。」
「わかった？おばちゃんの言いたかったことはそういうことや。」
と父は私に笑いかけてきた。
生島には大昔から大避神社が祀られており神地として立ち入り禁止になっている。そのため生島にはたくさんの広葉樹が生い茂り、海へ栄養分を補給する役目を果たしている。一方、千種川は宍粟市の江波峠から長々と流れ下り、その間、たくさんの陸上の有機物を溶け込ませ、ここ坂越湾に流れ込んでいる。豊富な栄養分がある海だからカキもおいしくプリプリに育つはずだ。
父からのヒントをもらいながら、今まで教科書や図鑑で学んだことと「カキがおいしくなる現象」とがストンと腑に落ちた。
海の恵みを戴くには、海だけでなく海を取り囲む自然が豊かでなければならないのだ。理科の話をしながらおいしく戴いたカキ。
「おばちゃん。ありがとう。」
と言ってお店をあとにした。
帰り際、少しお腹を落ち着かせるために黙って散歩をした。
頬にふれる風、波のちゃぷん、ちゃぷん、サワサワとなる葉擦れが耳に心地よい。
海が山や川、島とつながって豊かになり、人間に豊かな恵みを与えてくれている。また、海の水は雨となって山や島の動物や植物を育てている。何もかもがつながっている。小さな生き物たちもその中で、それぞれの役割を果たして生きているのだと思った。人間はそのつながりの中でどんな役割を果たしているのだろう。今の私にはまだわからない。精いっぱい勉強し、自分なりの答えをみつけだしたい。

入選

わたしたちの大切な水道

奈良県　香芝市立香芝東中学校　三年　松岡　あかり

「あなたにとって水道ってどんなもの？」という問いに対してどんなことが思い浮かぶでしょうか。私はつい最近まで、水は無限にあって、水道はいつでも好きなだけ使えることが当たり前だと思っていました。地球の表面の７０％は水で覆われ、地球は「水の惑星」と言われています。このことから、水はどこにでもあるから、将来もずっと使えるもの、好きなだけいつでも使えるものと考えてしまいがちです。

しかし、陸の生物が利用できるのは、そのうちのわずか約２．５％しかなく、水は貴重な資源のひとつとして考えるべきものです。

近年では干ばつがよく発生しています。その反面で洪水を引き起こす原因にもなっています。水量は天候によっても影響を受けるので、「水」と上手に付き合っていく方法を十分に考える必要があります。

３月には東北地方で発生した大規模な地震により断水が起きました。私の両親や祖父は水道の仕事に携わっているので、「もし、奈良で大地震が起きると水道は大丈夫なの？」という質問をしてみました。すると、「大地震が起きると、断水が起きるかもしれない。」という答えが返ってきました。

それは地震に強い水道管や設備になっていない場所があるからだそうです。その理由として、地震に強い水道にするためには莫大なお金がかかるにも関わらず、近年は人口減少によって水道局の収入が減り工事の資金が足りないこと、そして水道局で技術を持った人が年々減っていることから、地震に強い水道管に交換する工事が遅れてしまい、多くの古い管が残っていることが分かりました。これは日本の水道に共通していることです。

私の住んでいる奈良では、近い将来に南海トラフによる大震災が発生することが予想されています。そして断水になったら、たちまち不自由な生活を強いられることが容易に想像できます。

私は「水道の課題」について調べてみました。先ほどの課題の他に、小規模になるほど水道局の経営が苦しくなっていること、川や湖など水道の原水の汚染や地球温暖化によるゲリラ豪雨や渇水が多くなっていて水道への負担が大きくなっていることなど、課題は山積みであることがわかりました。

課題の解決に向けて、水道に従事している方々は日々頑張っておられます。

では、私たち利用者に何ができるのでしょうか。

まず、水を無駄使いしない行動はもちろんですが、省エネルギーの行動は地球温暖化の抑制に効果があり、汚れた水を流さないことなど環境にやさしい行動も大切です。そのうえで、私たち利用者が水道に関心を持ち、応援していく姿勢が大事なのではないかと思います。

人口が減少する状態が続いて利用者がさらに減少することが予想されています。水道の収入が少なくなる中で、この先も同じ料金で同じ内容の水道サービスの継続を求めることはとても難しいということを私たちは理解しておくことも必要です。

世界に目を向けてみると、大半の国では水道の水を飲むことができません。それどころか飲み水の確保でさえ難しい国がたくさんあります。日本には世界に誇ることのできる高い水道技術があるので、蛇口をひねると５１項目のきびしい水質基準を満たした安全な水がいつでも出てきます。これは当たり前過ぎて忘れがちですが、とてもありがたいことなのです。海外に友達ができたら、まず日本の水道を自慢したいです。日本の進んだ水道技術が活かされて蛇口から安全な水が飲める国が増えていけばいいな。頑張れ日本の水道。私はずっと水道を応援します。

入選

水環境を考える

広島県　広島大学附属福山中学校　三年　加藤　里桜

『世界が水を奪い合う日・日本が水を奪われる日』。私は冬休みに図書館でこの本を手に取った。

バングラデシュに暮らす人達は、井戸水を飲んでいたそうだ。しかし、この井戸水はヒ素によって汚染されていた。地下にもともとあったヒ素を含むヒマラヤの岩石が、長い年月をかけて風化し、下流のデルタ地帯に蓄積した。それが、土中の鉄分や、植物が枯死してできる泥炭に取り込まれ、蓄えられた。そして、その地下水を人間がくみ上げ始めたことで、地上に現れてしまったのだ。ヒ素は慢性中毒を引き起こし、最悪の場合、死に至る。しかし、浄化システム等の水インフラが整っていない国では、今日という日を生きるために、汚染された水を飲まざるを得ないのが現実だ。この本から、世界には汚染により、慢性的な水不足の状態で生活している人達がいる事を学んだ。

この本を読み、日本ではこのような事例はほぼ起こらない、という事に気がついた。調べてみると、技術の一つとして、緩速ろ過という浄化方法があることを知った。細かな砂の層に、一日四～五メートルのゆっくりとした速さで水を通す浄化方法だ。砂層に存在する微生物の分解作用によって水の中の浮遊物などを取り除くことができ、同時に細菌や悪臭も除去できる。

この浄化方法は、私の住む岡山県でも使われていた。津山市には水道の未普及地域が、約二百戸あった。市街地からは地理的に遠く、これまでは沢水を住民が簡易処理して使用してきた。しかし近年、安定して使用出来る水が得られないという課題が出てきた。雨の降り方が変わって水が濁りやすくなったり、野性動物などの糞尿が原因で水質が悪くなったり等が原因だ。こうした課題を津山市の行政支援として解決するのは財政的に厳しく、できるだけ構造が単純で管理の手間が少なく、薬品類を必要としない方法が検討されたのだ。これは一つの例だが、このように日本人は代々、使用できる水を安定して確保出来るよう工夫してきたのだ。

現在、水質汚染が世界問題として取り上げられている。実際、世界の生活排水の九十パーセントは未処理のまま放流されており、特に途上国で排水処理率は低い。これは水インフラが整っていないことも影響していると思う。しかし、日本も例外ではない。水インフラが整っているにも関わらず、生活排水による汚染が目立っているのだ。例えば、伊勢湾を汚濁している物質の構成比は、生活排水四十九点一パーセント、産業排水三十八パーセントと、生活排水が産業排水を上回り、ほぼ半数を占めている。魚介類等を介して、自分達の口へ入ってくる水が汚染されているという事は、私達にとっても大きな問題だと思う。

この問題を解決するために、私達は家庭で何ができるのだろうか。水の汚れの度合いを表す指標に「ＢＯＤ」というものがある。ＢＯＤとは、微生物が水の汚れを分解する際に使う酸素量を示し、この数値が高いほど環境への負荷が大きいと言われている。例えば、使用済みの天ぷら油二百ミリリットルを鯉や鮒が住めるＢＯＤ数値にする為には、風呂桶二百杯分の水が必要になる。また、水に含まれる酸素は、魚や水中に住む昆虫にとって、生きるために必要なもので、微生物が汚れの分解にたくさんの酸素を使ってしまうと、魚の窒息死などにも繋がる。だからこそ、私達がまずそこを最小限になるよう、意識する必要がある。洗い物をする前に新聞紙等の古紙で油のついた皿を拭いたり、米の研ぎ汁の再利用をしたり等、少しの生活の変化で協力出来ることが、まだ各々にある。

全ての生物が生きていく為に、水は欠くことが出来ない。その意識をより多くの人が持ち、各家庭での取り組みを広げ、積み重ねていくことが何より大切だ。先人が工夫しながら守ってきた水環境を、未来へと繋げたい。

入選

水の未来と私の決意

香川県　高松市立勝賀中学校　二年　横関　美南

雨の夏、水の制限の夏、今年の夏は水で私たちの生活が大きく変わったと思う。線状降水帯や記録的豪雨など、水に関するキーワードもよく耳にするようになり、私たちの水に対する意識が変わっているのではないかと感じる。

どんなことをするにしても、必ず必要になる水。それは生きるために欠かすことのできないものだ。今は、蛇口をひねるだけで安全できれいな水が出てくるのが普通のように思う。しかしいつも安全な水が出てくることが普通ではないのを知るきっかけになった災害があった。それは二〇一八年に起こった西日本豪雨だ。私のいとこは岡山県に住んでいるので、生活する中で不便なことがあったそうだ。それは水に関することである。一応水は出ているけれど、きれいな水ではないという状況が続いたそうだ。いとこたち家族は、「水が出るだけでもよかった」という感じで生活していた。ほかの地域の人は家が壊れたり、水が出なかったりする中で生活しているので水が出るだけでもありがみを感じていたそうだ。これを聞いたとき、私は蛇口をひねるだけで安全な水が出るということは決して普通ではない恵まれたことだなと思った。

他県だけではない。私が住んでいる、この香川県も昔から水に困っていた。雨が少なく、雨が降っても、すぐに海に流れこんでしまうという地理的条件が香川県の水不足を引き起こしているのだ。水不足を少しでも解消するための取り組みとして、取水制限を行っているらしい。取水制限とは河川から水をとって流す量を減らすということで、香川県の場合、吉野川から香川用水に流している水の量を減らしている。この取水制限は、毎年のように実施されている。使う水の量も少なくしなければならない取水制限。しかし砂漠になることを心配されている香川県ではとても重要な取り組みなのだ。私は、この取水制限を今夏初めて知った。今、取水制限と聞いて何のことか分かる人は少ないと思う。だからこそ、自分に身近な存在、水について興味を持ってほしい。

水について興味を持ち始めた私は、この夏、節水に取り組むことにした。毎日少しずつ工夫をしながら、水の使用量を減らそう、という取り組みだ。例えば、水を勢いよく出しすぎない、歯みがきやうがいをするときは、コップを使う、などと家族に呼びかけ、協力してもらった。まずは一週間、工夫をしながら生活すると、使用量の平均を何も工夫していないときの平均よりも百リットル減らすことに成功したのだ。調査が終わっても、水を使うときに、「節水しよう」という意識を持って生活できていたと思う。弟や妹は特に節水に協力的で、今でも水を使うときには節水を心がけてくれているように感じる。このように、自分だけでなく、周りの家族にも、呼びかけることによって、それが維持されていい結果をもたらすんだなと思った。

今、日本には水によって困っている人がたくさんいる。でも水は生きるために欠かすことのできないものだ。水は命をつくるものでもあるし、命をうばうものでもある。そんな水と、私たち人間は上手に付き合っていかなければいけない。水から自分を守り、自分たちで水を守ることが重要になってくる。未来の水のために私たちは何ができるのか、一人一人が考え、実行することで、少しずつ変わってくるものがあると思う。百年後、二百年後も、水が人類の生活を支えてくれますように。私は今日も、ゆっくり蛇口をひねる。

入選

水がつなぐもの

愛媛県　新居浜市立南中学校　三年　椛島　采奈

「山と海はつながっている」

私がこのことを意識するようになったのは、朝の連続テレビ小説「おかえりモネ」の影響です。主人公の祖父のセリフですが、この言葉はドラマの主人公だけでなく、私の心も大きく動かしました。山と海、この二つがつながっているなどとこれまで考えたことがなかった私は、まさに目から鱗が落ちる思いで、この話に耳を傾けました。

山と海を繋ぐもの、それは川です。そして、その川に流れる水こそが、それぞれをつないでいるのです。一見関係のないように思えますが、水はこの二つを大きく結びつけています。山に雨が降り、そこで育った葉が養分となって雨水とともに川へ流れ、やがて海へと流れつきます。その養分をたっぷり含んだ水は、海の生物たちの繁殖環境を整え、多くの魚介類を育てます。私たちが口にする魚や貝はまさに水に育てられているのです。日本では昔から「魚つき林」という言葉があって、漁業にとって重要と思われる森林を、魚がついているということからそう呼んだのだそうです。つまり、海の恵みは山から流れている水によってもたらされていると言えます。今回、水の新たな一面を知り、さらに水の重要性について考えてみました。

水は、私たちの生活に恵みをもたらす存在ですが、ときに牙をむくこともあります。近年、日本だけでなく世界的にも水によって多くの被害がもたらされています。土砂災害、洪水、浸水といった水による被害、また地震によって引き起こされる津波など、私たちの生活を脅かす存在でもあります。東日本大震災での津波の被害や西日本豪雨は、まだまだ記憶に新しく、今もなお、悲しみの中にいる人がたくさんいます。水による被害は、私たちの身近な問題なのです。

祖父に聞いた話では、四十年ほど前、一週間近く大雨が降り続き、国領川がかなり増水したことがあったのだそうです。川の流れがどんどん激しくなり、土手がえぐられ、土手に植えられていた松の木が流されていく光景はとても怖かったと話してくれました。そのときは、浸水などの被害はなかったようですが、祖父母は幼かった私の母や叔父たちをすぐに逃げられるよう準備をし、寝かしつけたとのことでした。また、調べていくうちに平成十六年にも台風の影響で国領川が氾濫したり、土砂災害が起こったりしたことで、多くの被害をもたらしたことが分かりました。反対に、雨が降らないことで渇水になり、松山市では断水状態となり、長い間給水制限がなされていたこともありました。これまで、愛媛県や新居浜市は災害の被害が少ない町だと思っていたので、このことを知り驚きました。

私が通っている中学校は、国領川の河川敷の隣に位置しています。私が生まれてからは河川の氾濫などの被害はありませんが、でもいつどんな状況になるか分かりません。昨年、学校でも浸水を想定した避難訓練が実施されました。避難の際には何を持っていくのかをそれぞれが考えて、荷物を準備し、最上階の三階に全学年が避難しました。今回の避難訓練では、これまでの災害を教訓とし、水の脅威から身を守ることを私たちは実践していかなくてはならないと、改めて感じました。

このように、水は私たちの生活に良くも悪くも大きく関わっています。「山と海はつながっている」、このことを知っているだけで、自分にもできることが増えてくると思います。水は私たちの命を守るもの。水を守る行動は私たち全ての生き物を守ることにつながります。大きなことはできなくても、小さなことを積み重ねていくことは今すぐにでもできます。ごみを川に捨てない、水を必要な分だけ使うなど、小さなことから見直していきます。「水がつなぐもの」と「つないでいる水」を守っていくために。

入選

眠る井戸への感謝の意味

福岡県　宗像市立自由ヶ丘中学校　二年　伊賀﨑　望

年が明けてすぐに、我が家では初詣より先にお参りをしに行く場所があります。それは家の庭にある、井戸です。井戸といっても昔話に出てくるような石で積んだようなつるべ落とし式の井戸ではありません。金属製の、丸いカプセルが土から半分顔を出したような井戸が、コンクリートの囲いとトタン屋根の中で眠っています。今は使っていませんが、私達家族が今の家に住む前の持ち主さんが、この家を建てる時に掘った井戸だそうです。めったに開ける事がないトタン屋根を年明けに一番に開けて、少量の日本酒を注いでお供えし、手を合わせてまた屋根を閉じます。神社でも仏壇でもない、しかも使っていない井戸になぜこんな事をするのだろう。母に尋ねたことがあります。

「さあ。でも、佐世保のおじいちゃんがそう言ってたから。」

それを聞いただけで私も（そうか、それならきちんとしなければ）と思い毎年手を合わせてるのです。

佐世保の祖父は、長らく真珠養殖を営んでいたそうです。私が幼稚園の時に亡くなったので記憶はおぼろげですが、優しい祖父だったことは覚えています。ですが仕事にはとても厳しい祖父だったと聞きました。ずっと大自然と向き合って働いていた祖父は、その厳しさと恩恵を誰よりも知り、自然と向き合い感謝する事を大切にしていたそうです。祖父の天気予報はとてもよく当たり、時には祖父の助言で難を逃れた事もあったそうです。父が今の家を買った時に、使っていない井戸があるという話を祖父にした所、祖父は急に改まって

「使っていなくても、井戸は絶対にほったらかしにしたらいかん。年明けに必ずお酒ば供えんね。水の出る所は絶対に粗末にしたらいかんよ。」

と両親に強く言ったそうです。祖父のそれまでの経験と実績を知っているからこそ、今の家に引っ越してきたから井戸へのお供えを欠かした事はありません。そのお陰かどうかは分かりませんが、大きな水のトラブルや断水にあった事はありません。

でも一つ、私には疑問がありました。なぜお供えが水そのものではなく日本酒なのだろう、ということです。水には水でお返しした方が良いのではないかと私はずっと思っていました。

ある時、私は日本酒について調べる機会がありました。日本酒は主に水とお米で作られます。成分の八割が水で出来ている日本酒は水のおいしさが命なのだそうです。そしてお米。広々とした田んぼを見て分かるように、良いお米をたくさん育てるには、豊かな水が必要です。上質な美味しい水と、豊かな水で育ったお米で作った日本酒は、自然の恵みの象徴として、神様に供える食事の中でも最もふさわしい捧げものだと考えられているそうです。それを知った時、私は一番に年明けの井戸の事を思い浮かべました。水の美しさと豊かさ、その事への感謝を表すには日本酒が最もふさわしいのだと私も思いました。祖父は理屈ではなく、経験からその事を知っていたのでしょう。

普段生活に欠かす事が出来ない水。でもその「水が普通にある」という事に対して感謝する事はどれくらいあるでしょう。ほとんど無いのではないかと思います。ですが、手洗いうがいで健康を保ち、おいしい水やご飯に栄養をもらい、お風呂や洗濯で清潔にし、私達は「普通の生活」を送っています。更に祖父のように自然と向き合う仕事の人はもっと密接に水が生活や命に関わってきます。だからこその感謝、だからこその敬意を祖父は両親に、私達に伝えてくれたのだと思います。我が家の井戸は今日も静かに眠っています。

入選

断水を経験して

福岡県　北九州市立熊西中学校　二年　宮部　みのり

私の住んでいるマンションの掲示板に、「水道設備の点検、工事のため、およそ三時間ほど断水になります。」というお知らせが貼られた。

母は「面倒なことになった。」と何度もつぶやいていた。私は、習い事で外出する予定があったので、自分には関係ないと思って、母の言葉を聞き流していた。

ところが、断水の前日に、急きょ予定が変更になり、断水当日は、在宅することになってしまった。両親共に、仕事で不在なので、私一人だ。私は、たった三時間なんて水を使わなくても大丈夫だろうと思っていた。しかし、母が、「自分で考えて準備しておかないと大変なことになるよ‼」と、しつこく言うので、しぶしぶ準備を始めた。

準備その１、水まわりすべてに断水の貼り紙を貼る。

理由・・・うっかり蛇口を開けてしまうと、漏水のおそれがあるから。

準備その２、飲料水を汲み置きする。

理由・・・飲み水、または、調理用として使用。

準備その３、手洗い用の水を汲み置きする。

理由・・・歯みがきや手を洗うときに使用。

準備その４、お風呂の残り湯を溜めておく。

理由・・・トイレを流すときに使用。

このように、水を使う場面を想定して、できる限りの準備をした。

父と母が出勤し、私だけになった。断水開始まで、まだまだ時間があるのに、私は気持ちが落ち着かず、家中をうろうろしたり、行きたくもないのに、トイレに入ったりした。

昼食の時間になり、手を洗おうと洗面台に向かった。準備しておいた汲み置きの水で手を洗い流そうとしたが、一人では上手くできない。しかたなく洗面台に水を張って、手を洗い流した。予想外にたくさんの水を使ってしまい、準備していた水の半分以上がなくなった。普段は意識していないが、たった一回手を洗うのにも、これだけ多くの水を使うのかと驚いた。

長い長い三時間がようやく過ぎ、やっと断水が終わった。水道のレバーを押すと、勢いよく水が出た。私は、ほっと胸を撫で下ろした。

今回、この断水を経験したことで、「蛇口から水が出る」ということが、どんなに便利でどんなにありがたいことか、身に染みた。

この一滴の水は、たくさんの方々が、日々、お仕事をしてくださっている結晶なんだと感じた。今後は、感謝を忘れず、大切に水を使おうと思う。

父は、仕事で海外に出張することがある。海外に長期滞在していると、日本との違いを一番感じるのが、「水」についてだそうだ。有名なホテルでも、立派なレストランであっても、水道水は決して口にせず、必ずミネラルウォーターを購入するそうだ。海外では、水の衛生状態が悪いため、水道水をそのまま飲むと、お腹をこわしてしまう危険がある。水道水がそのまま飲める日本は、世界的にみて、とても珍しい国だと教えてくれた。

そういえば、私がシンガポールへ旅行した際も、ミネラルウォーターを購入して使用したことを思い出した。

「資源」というと、石油や石炭、金属などをイメージするが、「水」も大切な資源の一つである。人間の身体は、体重の約六十パーセントが水分だ。水なしで生きていける生物はいない。

私たちの次の世代、またその次の世代も水道水が飲めるように、水を取り巻く環境を守り、維持していくことが重要だと考えた。

入選

「私の町を巡る水」

佐賀県　佐賀大学教育学部附属中学校　二年　梅﨑　知佳

私が住んでいる町は佐賀市の水ヶ江という地区だ。この水ヶ江という名前には、「水」と「江」という水に関係する文字が二つ付いている。

私の家の周りには小さい川や水路があり、小さい頃から水に囲まれて暮らしてきた。家の裏の水路にはメダカや小さい魚やカニなどの生き物がいて、祖父と一緒に見つけたり取ったりして遊んでいた。

水に囲まれたこの町の環境は私にとっては当たり前で、特別な事とは考えていなかったが、他県で育った母は初めてこの町に来た時町の水路の多さにびっくりしたそうだ。

水ヶ江地区は佐賀城のお堀の東側にあり、昔は武家屋敷が並んでいたところだ。地区を横切るように多布施川という川が流れ、川から井樋（いび）と呼ばれる水路がたくさん出て、町に張り巡らされている。江戸時代には各々の武家屋敷の敷地内にこの井樋が引かれ水道として利用されていた。

佐賀県は全国でも有数な米の生産地だが、米をたくさん作っている佐賀平野はもともと干拓によって土地を広げていったため、常に水不足に悩まされていたそうだ。

水が少ない佐賀平野の城下町と農業地帯に飲用生活用水と農業用水を引くために、水を行き渡らせる仕組みを江戸時代初期に作ったのが、「成富兵庫茂安」という人であるという事を小学校の総合学習で学んだ。

成富兵庫茂安は、佐賀平野の北にある脊振山から始まる大きな川である嘉瀬川から多布施川に水が流れるように石井樋という施設を作り、さらに堤防や用水路やため池をたくさん作り、佐賀平野の飲用水と農業用水を確保すると同時に川のはんらんや洪水を防いだ人物だ。佐賀では「治水の神様」と呼ばれている。私が育ち見慣れている町の川と水路の風景も、成富が作ったものだ。

私の町では、渇水と言われた年でも少なくとも私が生きて来た間は今まで一度も給水制限を経験したことがない。現在は家の裏の井樋から飲み水を採取することはないが、佐賀市の上水道は多布施川の上流から取っている事を小学校の社会科見学で水道局に行った時に教わった。江戸時代に作った水道の仕組みが現在でも利用できているのには驚いた。成富兵庫茂安は本当に偉大な人であったのだなと思う。

今年二〇二一年８月、佐賀県に大雨が降り私の町は冠水してあちこちで通行止めになった。一昨年の九州北部豪雨の時は川や水路から水があふれ、家が床下浸水した。雨の中川の鯉が逃げ出して道路を泳いでいた。程度の大小はあるがここ数年は、毎年梅雨や夏に豪雨になり一度は道路が冠水してしまう。梅雨の時期は学校が休みになる日が多い。

もともと土地が低く冠水しやすい地域なのだが、それにしても最近は毎年のように冠水してひどいね、と祖父母が困った顔で話していた。

成富兵庫茂安が作り、江戸時代から現代まで四百年くらいの間うまく行っていた佐賀の町に水を巡らせる仕組みが、ここ数年になってうまく行かなくなってきたように感じて私は心配している。

本で明治時代から昭和３０年代頃くらいまでの七十年間の佐賀市の気温を見たが、八月の平均気温が２６．７度だった。一方今年の夏はテレビのニュースで、佐賀市の気温は３７度まで上昇するため熱中症に注意するように、と毎日のように報道されていた。

都市化と地球温暖化の影響で気温が上がり水の循環が変化して雨がたくさん降るようになり、豪雨の頻度が増し、水害が多くなってきていると感じる。

私をこれまで見守ってくれた私の町を巡る水が、これからも同じ姿でいてくれるよう、私に何ができるのかを考えていきたい。

入選

救う水、奪う水

熊本県　嘉島町立嘉島中学校　二年　金子　夏歩

水はあなたを救いますか。あなたから何かを奪いますか。

「水の郷」と呼ばれる嘉島町に住んでいる私は水に救われたことしかありません。贅沢なことに、嘉島町のほとんどの家では蛇口をひねればおいしい地下水が出てきます。他にも天然プールや浮島神社があり、嘉島町はとても水に恵まれています。そんな水に恵まれている私も学校で行なわれる水についての授業や町内に貼られている水のポスターなどを見て、水の大切さは分かっていました。しかし、数か月前、その水の大切さを身をもって実感する出来事がありました。中学一年生の一学期を全力で駆け抜けた私は、二学期後半から突然、朝起きることが辛くなり頭痛に悩まされ今までできていた勉強や運動が思うようにできなくなりました。病院に行くと「起立性低血圧」と診断されました。この病気は急に立ち上がった時や起き上がった時に血圧が低下し、立ちくらみやめまい、頭痛などが起きる病気です。私も実際に血圧の検査を行った結果、血圧が正常の半分程しかなく、脈は正常の２倍程ありました。私は良くなりたい一心でウォーキングや筋トレ、ストレッチ、マッサージ、塩分摂取などをするように心がけていました。しかし、思うように回復することはありませんでした。そこで病院の先生に相談すると「水分補給が何よりも大切だ。」と言われました。一日に必要な水分量は健康な人で２Ｌぐらい私の場合だと２・５Ｌぐらいだそうです。最初は「健康と水って関係あるの？」と思っていましたが、水を意識して、飲みはじめてから、体の調子がよくなりました。厚生労働省によると水の摂取量が不十分であることで熱中症や脳梗塞、心筋梗塞など様々な病気を引き起こすことがあるそうです。その予防にはこまめな水分補給が欠かせないそうです。まさに、水は命を救ってくれるものです。

では、本当に如何なる場所でも命を救ってくれるものなのでしょうか。世界に目を向けてみましょう。ユニセフによるとアフリカ諸国を中心に毎日８００人、年間３０万人の子どもが水によって命を奪われているそうです。命を救ってくれるはずの水がなぜ命を奪うのでしょうか。それは「汚れた水」が原因です。子どもたちの多くは池や川、整備されていない井戸など、日本では到底飲むことなど考えられないような水源に頼るしかないそうです。やっとの思いで手に入れた水も多くの場合、泥や細菌がたくさん混じっていて、それを飲むとたちまちお腹をこわして命を落としてしまうこともあるそうです。このことを知り、不衛生な水しか飲むことができない国で、私と同じように水が必要な病気を患っている人たちのことを思うと胸が痛くなりました。水の持つ「光と影」を知り、衝撃を受けました。

では、私たちに何ができるのでしょう。それは「救う水」を大切に使い、後世に水の持つ「光」の部分を受け継ぐことではないでしょうか。私が水分補給を意識するようになり気付いたことがあります。それは、水を使う時の意識を変えれば、水を大切にできることです。ペットボトルの水を飲む時は残りの量がひと目で分かるので大切にします。しかし、手洗いや歯磨きの水は「少しぐらいいいだろう。」とついつい流したままにしがちです。１分間水を流したままにすると、２Ｌペットボトル６本分もの水が無駄になります。だから、私は頭の中に「想像のペットボトル」を持つようにしました。そうすることで、目に見える形で水の大切さを実感することができました。今、自由に使っている水は私たちだけのものではありません。世界のみんなの水であり、未来の水でもあるのです。

みなさん、頭の中に「想像のペットボトル」を持ち、限りある水を大切に守っていきましょう。

入選

水の恩恵に釣り合うまで

大分県　九重町立ここのえ緑陽中学校　二年　岩下　真理華

「ついにその日がやってきた。午前四時に目が覚め裏の川を覗いた。ものすごい濁流の音、激しい雨、水嵩が増していた。『やばい、避難しなくては』母屋に行き、母と弟に『逃げるよ。早く荷物をまとめて』と言ったのが午前五時三十分でした。準備している間に川が氾濫。間に合わない。」

近年、気候変動は全ての国で大きな問題となってきている。私は、四年ほど前から日本の異常気象が多くなっていると感じる。特に二年前、日本各地を襲った「令和二年七月豪雨」に衝撃を受けた人も少なくないだろう。令和二年七月、大分県内の総降水量が多かったところでは千七百ミリを超えたそうだ。冒頭に書いたのは、私の住んでいる九重町の住民が書いた、災害の手記の一部である。九重町では一時間当たりの降雨量が八十ミリ近くになったときがあり、全壊七戸、多くの地区で断水が生じるなど大きな打撃があった。私の家の近くの水力発電所は、形をなさないほど壊れてしまい、今年の三月頃にようやく復旧工事が完成した。道路が寸断され私の家も一時孤立状態になった。どんなに私たち人が自然を切り開き人間の都合のいいように開発し世界をつくり変えても、自然には勝てないのだと悟った瞬間だった。自然は、人間のつくり上げた文明など一瞬で壊してしまえる力を秘めている。世界は人間によって支配されているように一見思われるかもしれないが、本当は違う。自然は全てを変えてしまえる。人類よりずっと速く、ずっと強く。

しかし、強大で恐ろしいほどの力を持っていることは自然の一つの側面にすぎないと私は思う。私たちは水の恩恵を受けて生かされているからだ。人間の体のうち、約六十パーセントは水でできている。私たちは飲み水無しでは生きていけないし、また工業用水や生活用水としての水も欠かせない。地球が「水の惑星」と呼ばれているように、きっと水がなければこの星すら成り立っていなかったであろう。私はこう思う。偉大な自然は形を変える。それを生命の活力とするか、自分たちの脅威とするかは私たちの行動次第である、と。気候変動を引き起こしたのは誰だろう。紛れもなく私たち人類だ。私たちは自らの行動によって自分たち自身を苦しめているのではないだろうか。

そうは言っても、この文明化が進んだ社会の中で、今の便利な生活を全て手放すのは必ずしも全ての人にとって簡単なことではない。ただ、気候変動の進行を止めることは難しいとしても、その進行を遅らせることなら、私たち誰もができると思う。私の学校が力を入れて取り組んでいるＳＤＧｓの中にも「気候変動に具体的な解決策を」との目標がある。私は、この言葉に二つの意味があると考える。一方は、政府が気候変動を「止める」という意味、他方は、私たち一人ひとりが自分にできることをして気候変動を「遅らせる」という意味である。ＳＤＧｓのスローガン「誰一人取り残さない」とは、「誰一人救う側・救われる側から取り残さず、取り残されず互いに協力しながら全人類が明るい地球の未来を目指す」ということではないだろうか。私たち一人ひとりが小さなことから始めていき、「取り残されない」努力をすることが大切なのだ。水道の水を流しっぱなしにしない。捨てるごみの量を極力減らす。耳にたこができるほど聞いたことかもしれない。しかし果たしてそれらを常に意識できているだろうか。私自身も、これをきっかけに自らの生活を見直してみることにする。

このような小さなことは私たちが享受している水の恩恵に到底釣り合わないのかもしれない。しかし、こういった小さな努力の積み重ねと人々の協力はやがて大きな力となり、きっと巡り巡って私たちに水の恵みをもたらすのだろうと、そう私は信じている。

入選

「元気玉」

宮崎県　宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　一年　﨑田　莉央

私達は水と食べ物がないと生きていけません。栄養のある食べ物は、きれいな水から作り出されます。私達が健康に過ごすための土台にあるものはきれいな水なのです。きれいな水は私達の「元気玉」です。

そんな「元気玉」が手に入らず苦しんでいる人々が世界には六億人以上もいます。特に水不足に悩まされている地域がアフリカです。子供達は学校へも行けず、水を求めて何時間も歩きます。何時間も歩いて得た水は決してきれいなものではありません。たとえ汚くても生きるためには飲むしかないのです。そして汚水を飲み、命を落としてしまう人がたくさんいます。きれいな水にアクセスできないために、治療すれば治るような病気でも命を落としてしまう人がたくさんいます。助かるはずの命が助かるはずだった命となっています。飲料水に関する死についてメディアで報じられることは少ないですが、洪水犠牲者よりもはるかに多い人が死に直面しています。一週間戦闘するだけのお金があれば、淡水化施設が五か所設置できます。五か所も設置できたら、元気玉をもらえる人が増えます。二〇一〇年に国連総会では「水と衛生を得る人権」を認めています。全ての人々が水と衛生を得るためには、世界中が寄付をしたり、技術を提供したりと協力していく必要があります。

日本という水が豊かな国に住んでいる私達にとっては、遠い国の話だと思ってしまうかもしれません。しかし、私達が募金をしたお金で水をきれいにする浄化剤が配給されるなど、貢献することができます。自分達には関係ないからといって顔をそむけるのではなく、できることをやっていくことが大切です。

また、過去には日本でも汚水が問題になったことがあります。父は宮崎県日南市の出身です。日南の中でも田舎の町で、スーパーや信号が一つもありません。その分、自然豊かで景色がいいところが魅力です。毎年春には蛍がまぶしいくらいいて、父は夜、蛍をつかまえて、電気代わりとして手元を照らしたことがあると言っていました。また、家の前の川にたくさんの魚が住んでいて、食べたことがあるそうです。しかし、川の上流に養豚場ができてから、蛍はいなくなり、きれいな川にしか住めない魚もいなくなりました。豚の排せつ物を川に流してしまっていたためです。私は蛍を見たことがなく、父の家でたくさん見ることができたと知って、とても驚きました。

また、父が小学生のころまでは、家に、水道と下水道がひかれていなかったそうです。山の近くにある湧き水をひいて使っていました。また、トイレはくみ取り式で、生活用水はろ過して裏の用水路に流していました。生活用水をある程度きれいにしてから流すのは大変だったと思います。中には処理していない家庭もありましたが、父の家庭でしっかり処理していたのは、当たり前だけどすごいことです。

昔の日本は工場から出る排水が原因となる公害が多くありました。今は工場から出される水は処理しなければならないという法律があるため、工場排水に関する問題は少なくなりました。現在では、生活用水での川、海の汚染が目立っています。汚染の原因が工場から生活用水になった今、水を汚さないように意識をすることが大切です。世界中の「元気玉」を守るべきです。私が出来ることとして、まずは、川や海にごみを捨てない、食器を洗うときは汚れをふきとる、無駄使いをしないなどがあります。これからは、誰もが身近に出来ることを積極的に実践していくことが必要です。

入選

廻り行く水を繋ぐ責任

鹿児島県　学校法人池田学園池田中学校　三年　黒瀬　こころ

「のどがかわいた」寝起きはいつもこうだ。すぐさまキッチンに向かい、コップに水を注ぎ一気に飲み干す。やはり、朝一番の水は最高だ。

「うまかどが。」背後から大きな声が聞こえた。祖父だ。

「こん水は、湧水と河頭浄水場の水が入っちょっからなあ。」目をやると、自慢げな顔の祖父が仁王立ちになっていた。私の祖父は、鹿児島市の浄水場で働いていた。母が小さい頃から昼の勤務に加えて夜勤もこなし、私たちが安心して飲めるように鹿児島の水をきれいにしていたという。ミネラルウォーターを買わない祖父の顔には、いつも「蛇口から出てくる水はうまい」と書かれている。実際、私も日本の水道水はおいしいと思う。

しかし、世界に視野を拡げてみるとどうだろうか。飲める水と飲めない水があるという現実。地球温暖化、水質汚濁など、人間の行動の影響で様々な問題が勃発している。そして近年、日本国内でも目を疑うような大きな問題が発生してしまった。

二〇二〇年、千葉工業大学の研究チームが、北海道と沖縄の水道水から、マイクロプラスチックが検出されたと発表した。中でも注目されたのは、ポリエチレンテレフタレートなどペットボトルに含まれる成分だ。ペットボトルといえば、飲料の容器として当たり前にどこにでも存在している、とても身近なものである。ペットボトルのゴミ収集日は、きまってどこの家庭からも満杯のゴミ袋が出されている。

ゴミ袋の数と比例するように増えていくペットボトルなどの海洋ゴミ――。こうした現状に胸を締め付けられ、私は二年前より海洋ゴミの一つである「マイクロプラスチック」について調査を始めた。鹿児島湾外では、海外から流れてきたゴミの多さに圧倒された。一方、鹿児島湾内では、日本製のゴミばかりだった。つまり、私たち鹿児島県民が出したゴミがたどり着いたということだ。私は、この結果に大きな衝撃を受けた。さらに、一見美しく見える砂浜に、数限りないマイクロプラスチックがあることを確認した。砂浜で砕けてマイクロプラスチックになったものや、川からたどり着いたであろうマイクロプラスチックもある。

鹿児島は、国内でも河川の数が多い方だ。川の流れによってマイクロプラスチックが形成されているとすると、鹿児島の水道水にもマイクロプラスチックが含まれている可能性も否めない。蛇口をひねるとマイクロプラスチック入りの水。「その水が体内に」と考えるだけで喉元が苦しくなる。私は、透明のコップを手に取り水道水を注いだ。無色透明でいつもどおりのきれいな水だ。「大丈夫」私は心の中で何度もつぶやきながら、マイクロスコープで細かく観察した。どこから見ても透明でキラキラと輝いて見える。マイクロプラスチックはひとかけらも見つからなかった。

なんとありがたいことだろう。私はコップ一杯の水をゆっくりと口に注いだ。まるで地球上の水が廻り廻って、ここにたどり着いてくれたような感覚を覚えた。

祖父や祖先が繋いでくれた生命の源「水」。だれもが安心して飲むことができるようになるために、私たちにできることは何だろうか。私たちは、まず「水を飲める」ことが当たり前ではないことを、正しく素直に知るべきだ。そして、地球の資源を「使わせていただいている」という受け身の認識をもたねばならない。そうすることで、自ずと水を大切に使い、ゴミを捨てるべき場所に捨てて、資源として再利用するというサイクルが生まれる。意識すれば、今すぐにでもできることである。

一人ひとりの行動が、鹿児島の、そして世界中の水をきれいにし、豊かな地球を未来へと繋いでいくと、私は信じている。

入選

水に負けず　水を大切に

沖縄県　那覇市立寄宮中学校　二年　大城　奈子

時には被害を与えるが、いつも私達を支えてくれている水。

私は今まで水は恐ろしい物だと分かっていた。いや、分かってはいたが、実感が湧かなかった。しかし、小学校のときにそれを思い知らされる出来事が起こった。それは私が家族やいとこと山原の源河川を訪れた時のことだった。私達は桃源郷のような川の様子に飛び回っていた。透明で透き通っている水、山に囲まれた源河川は、穏やかで鳥の鳴き声が響き渡っていた。しかし、途中からあいにくの雨模様になってしまった。泳いだり、ボートに乗ったりして楽しく遊んでいた私達だったが、水位が五ｃｍ程上がってきたので、ホテルに戻ることにした。その後、救急車やパトカーのサイレンが聞こえたので私達は川の様子を見に行ったのだが、私は我が目を疑った。川は茶色く濁り、水位も上がって波立っていたのだ。先程まで見えていた陸も見えなくなり、大きな丸太も流れていた。つい先程まで遊んでいたことが嘘のような光景。川の反対側にいて、取り残された人達も大勢いたという。あと五分川から帰るのが遅れていたら、私達も洪水に巻き込まれ、取り残されていたにちがいない。そう考えると、私は水に対する恐怖感を覚えた。東日本大震災では、東北地方を中心に大津波が押し寄せ、住宅地や農地を呑み込み、甚大な被害をもたらした。死者と行方不明者の合計は二万五千人以上に上ったそうだ。水は時に人の命を奪い、大きな被害を与える物であると改めて感じた。

一方で水は、人々を助け、人間には欠かせないものである。ウクライナとロシアが戦争をしている今、私は信じ難いことをニュースで知った。それはウクライナの六歳の子供が飲み水がなく、脱水症状で死亡したというニュースだった。私は水不足が原因で人が亡くなったという事実を知り、普段自分がいかに水の大切さを忘れ、水を無駄にしているかということに気づいた。

今まで私は手洗いの時、水を無意識に出しっぱなしにしていた。インターネットで水の使用料について調べてみると、一人あたり一日に最低でも百Ｌ必要だと言われているにも関わらず、三十ヵ国以上の国々の人達が、二十Ｌにも満たない給水量で暮らしていることが分かった。しかし日本人は一人あたり二百Ｌもの水を使っているそうだ。大量の水を使っている私達日本人。全世界の人々が必要最低限の水を使用できるように努力しなければならない。そのために一番簡単に取り組めるのは節水だと思う。手洗い、歯みがき、シャワーの水をこまめに止めたり、湯船に貯めた水を洗濯に再利用したりと、身のまわりでできることはたくさんあると思う。例え少しの節水でも一人一人が心懸けることで、多くの水が集まり、たくさんの人々に水を届けることができると思う。

また、持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）の目標六にも掲げられている「安全な水とトイレを世界中に」は、世界の四人に一人が綺麗な水を使えないという現状から、大きく何かが変わらない限り、二千三十年までに目標六を達成することは不可能とされているそうだ。目標六を達成するための資金が不足しているからでもある。そのため、目標六を達成するためには、さらなる資金が必要となってくる。私は今まで赤い羽根共同募金やユニセフの募金しか行ってこなかったので、今後は積極的に他の募金活動にも参加したい。「水を大切にする」とは、節水だけでなく、多くの人が水を十分に使用できるように資金を援助したり、できるだけ水を汚さない生活を心懸けることなのではないだろうか。

時には被害を与えるが、いつも私達を支えてくれている水。一人一人が意識し、心懸けていくことが「水を大切にする」ということにつながるのだと私は思う。

入選

楽園の水

財団法人ハワイ日本人学校レインボー学園　三年　遠藤　あかり

青い空、青い海、強い日差し、人々の笑顔、そんな楽園のハワイに着いて最初に私が思ったのは、「喉が渇いたな、水飲みたい。」だった。外国のイメージは、水道水が飲めないというもので、私は当然ハワイもそうだろうと思っていた。実際、行きかう人は水のペットボトルを持っていた。その後、ホテルで数週間過ごしたが当然、水はペットボトルで過ごした後、家が決まった。そこで衝撃的な出来事が起こった。なんと、父と母が普通に水道の蛇口から水を出し、そのままコップに注ぎ飲んでいたのだ。私は絶句していたが、両親は私にその水を勧めてきた。特に喉は渇いていなかったが、とりあえず飲んでみることにした。色は透明、匂いはなし、おそるおそる口に運ぶ、ゴクリと飲んでみた。美味しかった。別にキンキンに冷えた水を運動後に飲んだわけでもない。外国の水道水を美味しいと思うなんて考えられなかった。

それからは、私は普通に水道の水を飲むようになった。まさに潤いのある生活。そして、ハワイの水に興味が湧き、学校の理科の授業で水に関する自由研究をした。調べれば調べるほど、ハワイの水は面白かった。まず、日本と同じ軟水だった。人のお腹は硬度にとても敏感だ。とても綺麗な水でも硬度が違えば、簡単に調子が悪くなるが、ハワイの水の硬度は全く同じなためそんな心配もない。さらに調べると、ハワイの水道水は地下水源からきていることが分かった。確かに、ハワイには大きな川はなく、私の住んでいるオアフ島にはダムもない。言われてみれば納得だった。しかし、この地下水がすごかった。ハワイは全体が火山の島なので、その土は火山岩が風化したもの。ハワイに降った雨水はこの火山岩でろ過され、地下に貯蔵される。天然のフィルターで綺麗にろ過された水ということだ。不純物はなくとても綺麗な水だ。この地下水源はとても豊富で、ハワイは綺麗な水の上に浮いている島だった。この自由研究でハワイの水の美味しさが分かることができた。

また、この課題では、なぜ水が世界にとって大事なのかも調べた。調べていくと、SDGsの目標の一つに安全な水とトイレを世界中にという目標があり、その目標の達成に向けて、今どのようなことが行われているかを知った。それと同時に、発展途上国にいる多くの子供たちは毎日学校に行かずに家族のためにやっとの思いで汲んできても、その水は茶色く色を奪う水であり、それが原因で年間百八十万人の子供たちが命を落としていることも分かった。このような子供たちを映した写真に笑顔はなかった。しかし、そのような写真の中でひとつだけ印象的だった写真がある。それは綺麗な水が飲めるようになった時の子供達の写真だ。その写真に写っていた全員の子供たちが綺麗な水を飲めるようになったことでたちまち笑顔になったのだ。そのことから私は、水はみんなを笑顔にして幸せにしてくれる魔法のようなとても身近な存在であり、人々を笑顔にする水を運ぶ水道もまた偉大だと思った。

そんな時、事件は起こった。なんと、ハワイの水が飲めなくなってしまったのだ。レッドヒルという軍隊の施設に石油が混入してしまったためだ。そのため、私たちはペットボトルの水を飲む生活を余儀なくされた。街の人達もいつものハワイの陽気な感じがなぜだかなかった。街の中にたくさんあった水飲み場もテープが張ってあり、使えなくなった。この事件で水道水の大切さに改めて気づくことができ、素晴らしい水があるところは楽園になるのだなと思った。又、水は一つの有限な資源であり、有限なものだ。私たちは、水の大切さに感謝し、大切に使っていかなければならない。

第４４回全日本中学生水の作文コンクール募集ポスター

第４４回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

１ 応 募 要 領　①テ ー マ・・・「水について考える」（題名は自由）
②対　　象・・・中学生（令和４年度に中学校に在学中の者、または、これらの者と同じ学齢の者を含む）
③原稿枚数・・・400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
④あ て 先・・・中学校等の所在する都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する者にあっては、国土交通省水管理・国土保全局水資源部
⑤応募期間・・・令和４年５月31日までに国土交通省水管理・国土保全局水資源部あて到着分有効
⑥版 権 等・・・○応募作品は自作の未発表のものに限る
○応募作品の使用権は、主催者に帰属する
○応募作品の返却は行わない

２ 審　　査　応募作品9,249編のうち、各都道府県の地方審査を経た178編について国土交通省水資源部による内部審査を行い、中央審査会の対象となる40編を選出。
令和４年６月29日に開催された中央審査会において、最優秀賞１編、優秀賞10編及び入選29編あわせて40編の入賞作文を決定。

３ 表　　彰　（１）賞および賞品

賞		賞　品
最優秀賞	内閣総理大臣賞	賞状、副賞
優秀賞	厚生労働大臣賞 農林水産大臣賞 経済産業大臣賞 国土交通大臣賞 環境大臣賞 全日本中学校長会会長賞 水の週間実行委員会会長賞 独立行政法人水資源機構理事長賞 シャワーズ賞 中央審査会特別賞	賞状、副賞
入　選		賞状、副賞

（２）表 彰 式　　最優秀賞及び優秀賞の受賞者を令和4年8月1日（月）にイイノホールにて開催された「水を考えるつどい」において表彰

４ 中央審査委員（敬称略）
名倉　良雄　内閣官房水循環政策本部事務局参事官：厚生労働省医薬・生活衛生局水道課長
緒方　和之　内閣官房水循環政策本部事務局参事官：農林水産省農村振興局整備部水資源課長
塩手　能景　内閣官房水循環政策本部事務局参事官：経済産業省経済産業政策局地域経済産業グループ地域産業基盤整備課長
永井　春信　内閣官房水循環政策本部事務局審議官：国土交通省大臣官房審議官（水管理・国土保全局担当）
川又孝太郎　内閣官房水循環政策本部事務局参事官：環境省水・大気環境局水環境課長
佐藤　太　全日本中学校長会編集部長
須磨　佳津江　キャスター
長崎　宏子　スポーツコンサルタント　元オリンピックスイマー
玉野井　晃　公益社団法人 日本水道協会調査部長
熊谷　和哉　独立行政法人水資源機構理事
橋本　淳司　水ジャーナリスト　武蔵野大学客員教授

５ 主 催 者 等　主催：水循環政策本部、国土交通省、都道府県
後援：文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、全日本中学校長会、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構

第４４回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿

番号	都道府県名		氏　名		氏　名		氏　名		氏　名		氏　名
1	北海道	○	三浦（みうら）　かんな								
2	青森県		武部（たけべ）　翔真（しょうま）		浪岡（なみおか）　葉純（はすみ）		前田（まえだ）　美優（みゆ）		荒沢（あらさわ）　玲華（れいか）		武部（たけべ）　芽衣（めい）
3	岩手県		青木（あおき）　縁（ゆかり）	○	佐藤（さとう）　奈穂（なお）	◎	澤井（さわい）　佳恋（かれん）		滝澤（たきさわ）　光来（きらら）		竹花（たけはな）　紀慧（のりあき）
4	宮城県	○	増川（ますかわ）　智穂（ちほ）		佐藤（さとう）　里桜（りお）		辻井（つじい）　珠希（たまき）				
5	秋田県										
6	山形県										
7	福島県		伊藤（いとう）　愛佳（あいか）		平塚（ひらつか）　燈真（とうま）		松本（まつもと）　彩楓（あやか）	○	満田（みつた）　栞音（しおん）		八巻（やまき）　天希（あまね）
8	茨城県		渡邉（わたなべ）　桃香（ももか）	◎	金沢（かねさわ）　青空（そら）		園田（そのだ）　桃子（ももこ）		永井（ながい）　歩（あゆみ）		近納（こんのう）　空良（そら）
9	栃木県		野澤（のざわ）　早良（さら）		髙橋（たかはし）　英乃（はなの）		鈴木（すずき）　麻綾（まあや）		中村（なかむら）　優介（ゆうすけ）		西村（にしむら）　香風（このか）
10	群馬県		林（はやし）　くらら		茂木（もてき）　梓鶴（しづる）		天田（あまだ）　ヒカル		片貝（かたかい）　晃士（こうし）		田中（たなか）　莉奈（りな）
11	埼玉県		清水（しみず）　優衣（ゆい）		岩崎（いわさき）　絢菜（あやな）		村山（むらやま）　愛実（あみ）				
12	千葉県		新行内（しんぎょううち）　柚乃（ゆの）		永田（ながた）　一花（いろは）		吉田（よしだ）　梨乃（りの）		木村（きむら）　舞夏（まなつ）		石井（いしい）　優月（ゆづき）
13	東京都		福田（ふくだ）　沙弥（さや）	○	沖田（おきた）　樹音（じゅね）		大場（おおば）　美遥（みはる）		髙木（たかぎ）　千陽乃（ちよの）		石川（いしかわ）　瑞貴（みずき）
14	神奈川県	○	永峰（ながみね）　由埜（ゆの）		原口（はらぐち）　櫂（かい）		若狭（わかさ）　いおり		初山（はつやま）　智康（ともやす）		近藤（こんどう）　杏樹（あんじゅ）
15	新潟県	◎	井口（いぐち）　慶香（きょうか）		佐々木（ささき）　芽依（めい）	◎	齋喜（さいき）　璃音（りお）		三嶋（みしま）　夏帆（なほ）		大塚（おおつか）　日那多（ひなた）
16	富山県		中陣（なかじん）　桃那（ももな）		堀川（ほりかわ）　公靖（こうせい）	○	湊（みなと）　遥真（はるま）				
17	石川県		服部（はっとり）　柊眞（しゅうま）								
18	福井県		中道（なかみち）　穏来（しずく）		中村（なかむら）　さくら		田中（たなか）　統敦（むねあつ）		吉田（よしだ）　凌太朗（りょうたろう）		宇佐美（うさみ）　潤（じゅん）
19	山梨県										
20	長野県										
21	岐阜県		平岡（ひらおか）　柚希（ゆずき）		道家（みちや）　さくら		加藤（かとう）　玲子（れいこ）		後藤（ごとう）　柚乃（ゆの）	○	矢橋（やはし）　悠（ゆう）
22	静岡県	○	石川（いしかわ）　怜奈（れな）		別所（べっしょ）　怜奈（れな）	○	山崎（やまざき）　倖来（さら）		中根（なかね）　瑚々亜（ここあ）		勝俣（かつまた）　理子（りこ）
23	愛知県	◎	中村（なかむら）　光里（ひかり）		鈴木（すずき）　結衣（ゆい）	○	薛（せつ）　知明（ちみん）		長田（おさだ）　悠希（ゆうき）		濱野（はまの）　彩音（あやね）
24	三重県		大澤（おおさわ）　由愛（ゆま）		曽原（そはら）　怜奈（れな）		櫻井（さくらい）　つむぎ	◎	谷野（たにの）　由依（ゆい）	○	山本（やまもと）　沙羅（さら）
25	滋賀県		北村（きたむら）　真琴（まこと）	○	石本（いしもと）　栞菜（かんな）						
26	京都府	○	古川（ふるかわ）　晏（あん）		髙橋（たかはし）　蒼空（そら）		辰巳（たつみ）　絢香（あやか）	◎	鈴木（すずき）　智尋（ともひろ）		
27	大阪府		田中（たなか）　姫乃（ひめの）	○	川畑（かわばた）　理桜（りさ）		北尾（きたお）　美尋（みひろ）		江口（えぐち）　友寿希（ゆずき）		神山（こうやま）　望々花（ののか）
28	兵庫県	○	山口（やまぐち）　倫佳（のりか）		岩田（いわた）　侑樹（ゆうき）		宮下（みやした）　弥瑛（やえ）		山中（やまなか）　美桜（みお）		今田（こんだ）　みずほ
29	奈良県	○	松岡（まつおか）　あかり		三浦（みうら）　悠雅（ゆま）		並河（なみかわ）　陶子（とうこ）		山口（やまぐち）　裕子（ゆうこ）		岡田（おかだ）　柚沙（ゆさ）
30	和歌山県	◎	福田（ふくだ）　純伶（すみれ）		重松（しげまつ）　那津実（なつみ）		大久保（おおくぼ）　颯人（はやと）				
31	鳥取県		中村（なかむら）　咲愛（さら）		津川（つがわ）　結依（ゆい）		津村（つむら）　心望（ここの）		福田（ふくた）　掌太郎（しょうたろう）		
32	島根県		津森（つもり）　咲良（さら）								
33	岡山県		福山（ふくやま）　奏心（かなで）		小林（こばやし）　樹生（いつき）		林（はやし）　弘武（ひろむ）		武田（たけた）　歩弥（あゆみ）		川端（かわばた）　悠愛（ゆあ）
34	広島県	○	加藤（かとう）　里桜（りお）		谷村（たにむら）　咲蕾（さくら）		潮海（しおみ）　晴子（はるこ）				
35	山口県		古重（ふるしげ）　葵（あおい）								
36	徳島県	☆	笠江（かさえ）　駿（はやと）		篠村（しのむら）　拓人（ひろと）		倉橋（くらはし）　麻友（まゆ）		栩本（とちもと）　芽衣（めい）		中平（なかひら）　迅人（はやと）
37	香川県	○	横関（よこぜき）　美南（みなみ）		中村（なかむら）　知恵莉（ちえり）		清水（しみず）　信太朗（しんたろう）				
38	愛媛県	◎	木下（きのした）　そら		石田（いしだ）　心咲（みさき）		松原（まつばら）　七海（ななみ）	○	椛島（かばしま）　采奈（あやな）		水田（みずた）　葵彩（あおい）
39	高知県										
40	福岡県	○	宮部（みやべ）　みのり		佐々木（ささき）　咲綾（さや）		前田（まえだ）　恵理子（えりこ）		渡真利（とまり）　柚季（ゆずき）	○	伊賀崎（いがさき）　望（のぞみ）
41	佐賀県	○	梅﨑（うめざき）　知華（ちか）		池田（いけだ）　莉愛（りあ）		藤木（ふじき）　佑成（ゆうせい）		田中（たなか）　日茉俐（ひまり）		小林（こばやし）　翔（しょう）
42	長崎県		田島（たじま）　美悠（みゆう）		山口（やまぐち）　寛奈（かんな）		寺井（てらい）　愛夏（あいか）		芦塚（あしづか）　華（はな）		野口（のぐち）　和花（わか）
43	熊本県	○	金子（かねこ）　夏歩（かほ）		元田（もとだ）　真菜（まな）		宮本（みやもと）　朋弥（ともや）		本山（もとやま）　芽唯（めい）		吉沢（よしざわ）　ゆい
44	大分県		東（ひがし）　澪（みお）	○	岩下（いわした）　真理華（まりか）		軸丸（じくまる）　薫（かおる）				
45	宮崎県	◎	三浦（みうら）　世来（せいら）	○	﨑田（さきた）　莉央（りお）		横山（よこやま）　恵都（けいと）		岩坪（いわつぼ）　愛子（あいこ）		楠（くすのき）　真佑来（まゆら）
46	鹿児島県		白澤（しらさわ）　茉依（まい）	○	黒瀬（くろせ）　こころ		鮫島（さめしま）　花音（かのん）		後藤（ごとう）　菜々（なな）		吉元（よしもと）　志織（しおり）
47	沖縄県		仲松（なかまつ）　蒼（あおい）		照屋（てるや）　幸加（さちか）	○	大城（おおしろ）　奈子（なこ）		玉城（たまき）　蒼（あお）		佐久本（さくもと）　和奏（わかな）
48	海外		中村（なかむら）　颯杜（はやと）		藤村（ふじむら）　円香（まどか）	○	遠藤（えんどう）　あかり				

（注）氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、☆は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選

第４４回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

都道府県名	地方審査優秀者数（編）	応募学校数	応募総数（編）			
				１年	２年	３年
北海道	1	115	115	54	32	29
青森県	5	1	49	0	21	28
岩手県	5	7	28	2	5	21
宮城県	3	5	23	6	11	6
秋田県	0	0	0	0	0	0
山形県	0	0	0	0	0	0
福島県	5	16	511	0	285	226
茨城県	5	12	567	87	282	198
栃木県	5	9	181	0	93	88
群馬県	5	5	436	3	214	219
埼玉県	3	5	57	15	17	25
千葉県	5	7	275	175	57	43
東京都	5	19	826	220	259	347
神奈川県	5	8	320	62	1	257
新潟県	5	5	40	1	6	33
富山県	3	7	431	82	177	172
石川県	1	2	2	1	1	0
福井県	5	1	22	0	0	22
山梨県	0	0	0	0	0	0
長野県	0	0	0	0	0	0
岐阜県	5	10	102	2	96	4
静岡県	5	7	40	5	18	17
愛知県	5	9	15	1	7	6
三重県	5	4	456	222	201	33
滋賀県	2	3	232	135	96	1
京都府	4	4	403	66	123	214
大阪府	5	7	263	243	2	18
兵庫県	5	8	193	1	83	109
奈良県	5	5	154	65	70	19
和歌山県	3	10	557	244	249	64
鳥取県	4	2	6	0	0	6
島根県	1	1	1	0	1	0
岡山県	5	11	16	8	8	0
広島県	3	5	112	0	110	2
山口県	1	1	1	0	0	1
徳島県	5	4	9	0	5	4
香川県	3	17	92	0	52	40
愛媛県	5	7	77	0	74	3
高知県	0	0	0	0	0	0
福岡県	5	5	264	0	174	90
佐賀県	5	18	492	0	319	173
長崎県	5	2	120	39	42	39
熊本県	5	14	1,133	336	467	330
大分県	3	3	16	0	7	9
宮崎県	5	5	306	81	145	80
鹿児島県	5	6	230	119	70	41
沖縄県	5	10	73	2	22	49
海外	3	2	3	2	0	1
合計	178	404	9,249	2,279	3,902	3,067

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

		応　募 学校数	応　募 総　数	性別		学年別		
				男	女	１年	２年	３年
		（校）	（編）	（編）	（編）	（編）	（編）	（編）
第1回	昭和54年	634	4,875	1,878	2,997	1,513	1,710	1,652
第2回	昭和55年	486	3,930	1,446	2,484	1,245	1,462	1,223
第3回	昭和56年	487	5,569	2,159	3,410	2,004	1,974	1,591
第4回	昭和57年	512	5,111	1,878	3,233	1,923	1,848	1,340
第5回	昭和58年	495	4,192	1,435	2,757	1,925	1,214	1,053
第6回	昭和59年	531	7,013	2,905	4,108	2,923	2,115	1,975
第7回	昭和60年	572	9,703	3,676	6,027	3,794	3,647	2,262
第8回	昭和61年	507	7,431	3,080	4,351	2,809	2,680	1,942
第9回	昭和62年	513	9,253	3,789	5,464	4,086	2,935	2,232
第10回	昭和63年	498	10,119	4,233	5,886	4,212	3,501	2,406
第11回	平成元年度	641	13,192	5,601	7,591	5,345	4,392	3,455
第12回	平成2年度	551	11,782	5,320	6,462	5,404	3,549	2,829
第13回	平成3年度	623	12,056	4,834	7,222	5,174	3,821	3,061
第14回	平成4年度	552	12,718	5,332	7,386	4,898	4,533	3,287
第15回	平成5年度	473	13,680	5,340	8,340	4,658	5,024	3,998
第16回	平成6年度	557	13,647	5,591	8,056	5,247	4,577	3,823
第17回	平成7年度	558	15,918	6,617	9,301	5,940	5,388	4,590
第18回	平成8年度	491	15,479	6,595	8,884	5,403	5,606	4,470
第19回	平成9年度	456	13,688	5,731	7,957	5,088	4,792	3,808
第20回	平成10年度	493	13,764	5,935	7,829	4,842	4,609	4,313
第21回	平成11年度	429	11,903	4,971	6,932	4,324	4,059	3,520
第22回	平成12年度	413	14,283	6,288	7,995	4,737	4,968	4,578
第23回	平成13年度	362	11,841	5,131	6,710	3,862	3,844	4,135
第24回	平成14年度	413	13,442	6,159	7,283	4,878	4,691	3,873
第25回	平成15年度	453	13,385	5,980	7,405	4,100	4,618	4,667
第26回	平成16年度	452	16,488			5,595	5,655	5,238
第27回	平成17年度	439	15,726			4,489	6,464	4,773
第28回	平成18年度	373	16,038			5,157	5,811	5,070
第29回	平成19年度	385	16,173			5,242	5,697	5,234
第30回	平成20年度	339	14,927			4,516	5,118	5,293
第31回	平成21年度	344	16,462			4,929	6,038	5,495
第32回	平成22年度	378	16,941			5,592	5,925	5,423
第33回	平成23年度	365	19,618			6,930	6,635	6,052
第34回	平成24年度	368	16,826			4,542	6,692	5,591
第35回	平成25年度	368	18,191			5,564	6,602	5,924
第36回	平成26年度	331	19,419			6,555	7,406	5,365
第37回	平成27年度	345	16,432			5,197	6,949	4,280
第38回	平成28年度	314	15,246			4,533	6,110	4,603
第39回	平成29年度	357	16,725			4,735	6,910	5,080
第40回	平成30年度	314	14,151			4,182	5,750	4,219
第41回	令和元年度	290	12,760			3,584	5,554	3,622
第42回	令和2年度	319	9,444			2,263	4,377	2,801
第43回	令和3年度	351	13,025			3,253	5,816	3,777
第44回	令和4年度	404	9,249			2,279	3,902	3,067
合　計		19,536	561,815			189,471	204,968	166,990

（注）・第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
・第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
（教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮）
・学年未記入者は、第35回101名、第36回93名、第37回6名、第42回3名、第43回179名、第44回1名で、学年別集計から除いている。

第４４回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

全国からの応募作品9,249編の中から選ばれた最優秀賞１編と優秀賞10編の表彰式及び最優秀作品の朗読は、令和４年８月１日（月）に東京都千代田区のイイノホールにおいて開催された、「水の日」を記念する政府主催行事「水を考えるつどい」内で実施されました。

最優秀作品の朗読の様子は、国土交通省YouTube(MLIT channel）で、令和４年８月下旬に配信予定です。

最優秀作文の朗読
徳島県　阿南市立那賀川中学校３年　笠江　駿さん
（内閣総理大臣賞受賞者）

瑶子女王殿下、作文コンクール受賞者、各賞授与者、
「水の日」応援大使『シャワーズ』による記念撮影

©2022 Pokémon ©1995-2022 Nintendo/Creatures Inc./GAMEFREAK inc.
ポケットモンスター・ポケモン・Pokémonは任天堂・クリーチャーズ・ゲームフリークの登録商標です。

国土交通省
Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

国土交通省水管理・国土保全局水資源部
〒100－8918　東京都千代田区霞が関２－１－３
電話　（03）5253－8111（代表）
ホームページ
http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html